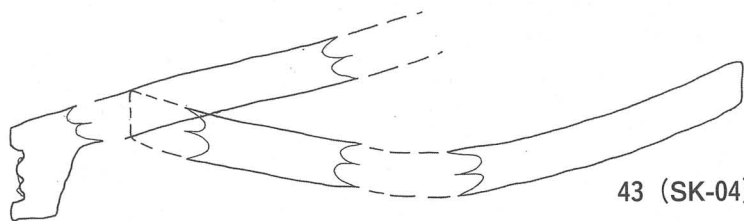
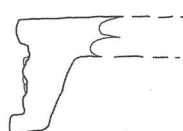


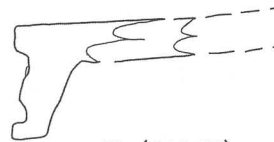
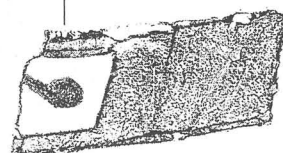
44 (SA-01)



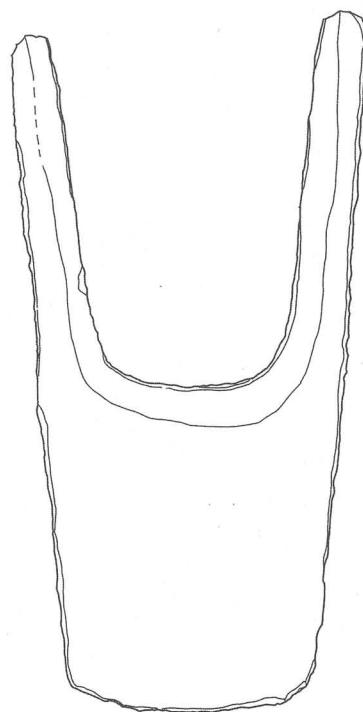
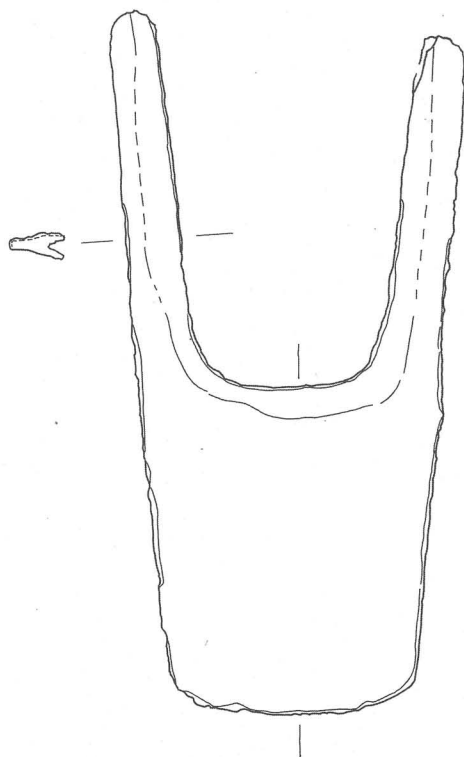
43 (SK-04)



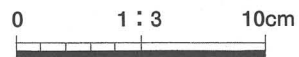
45 (SH-02)



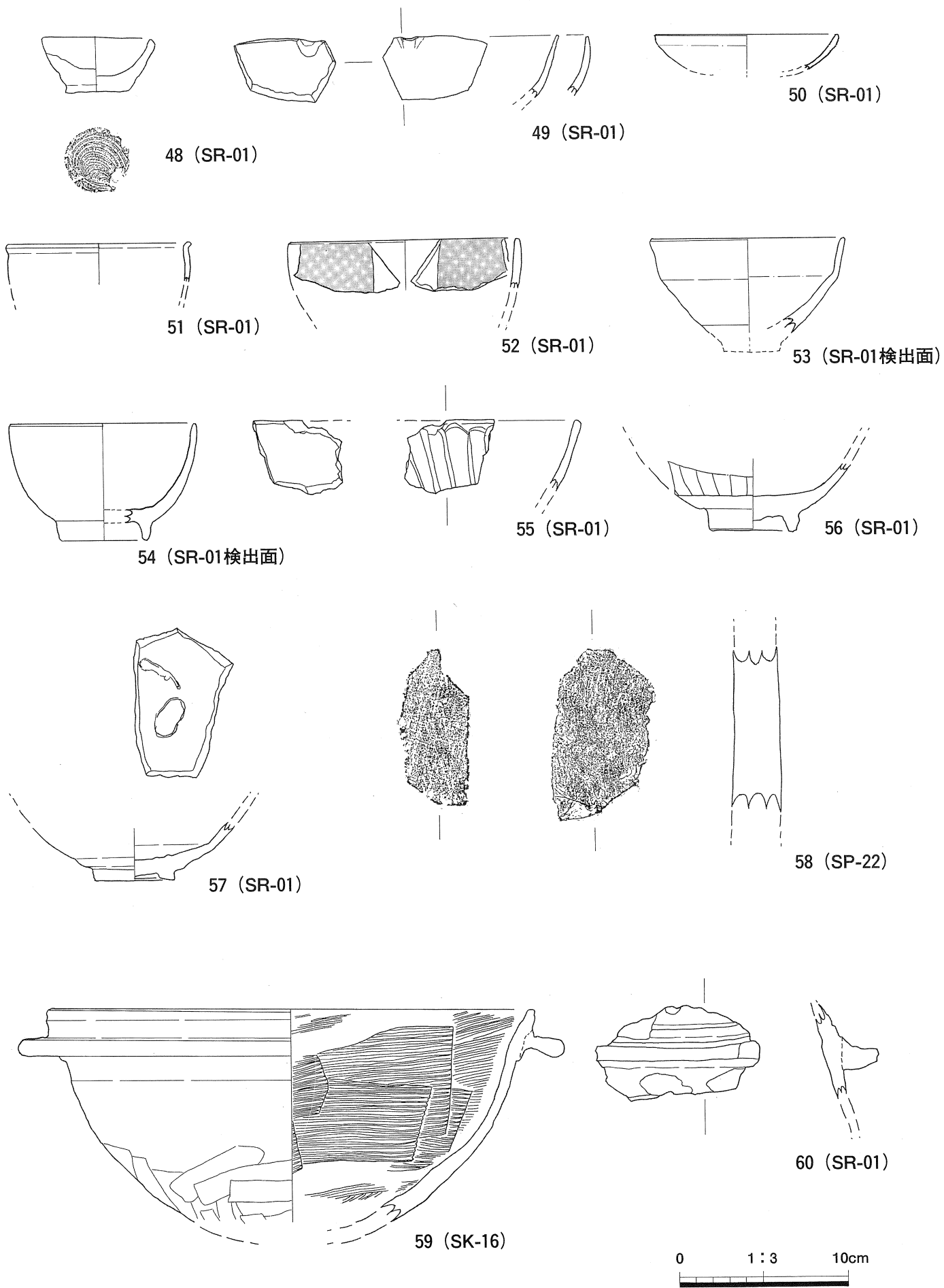
46 (SH-02)



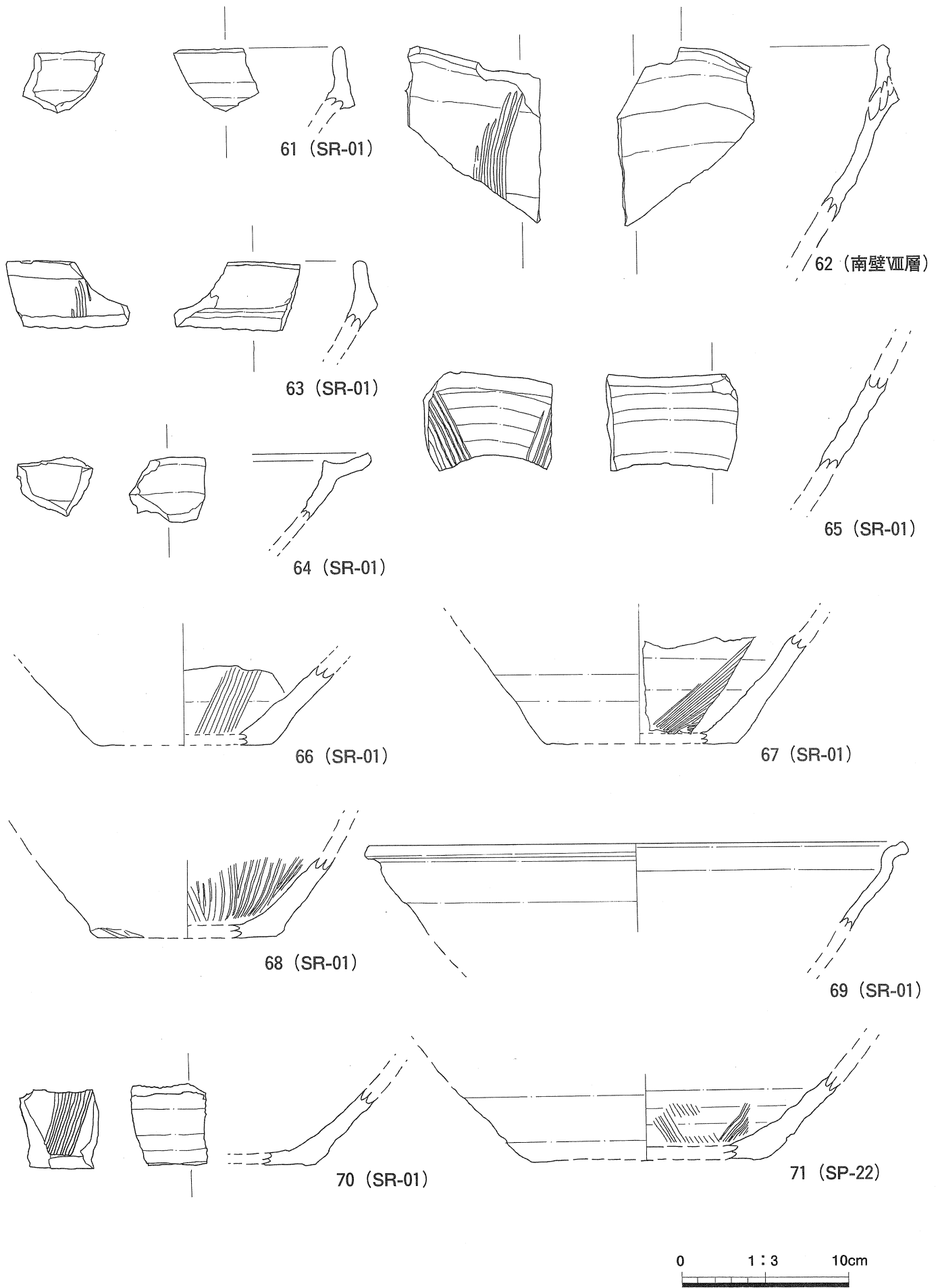
47 (SR-01)



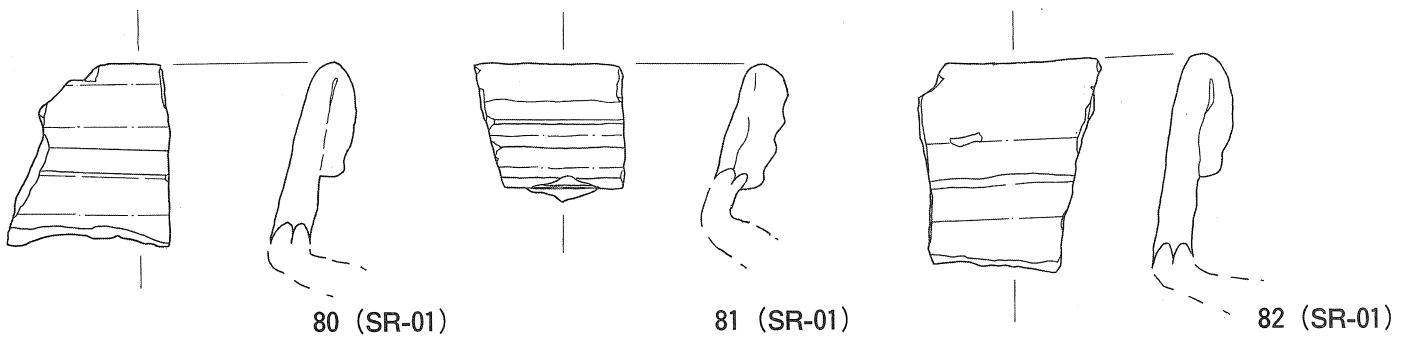
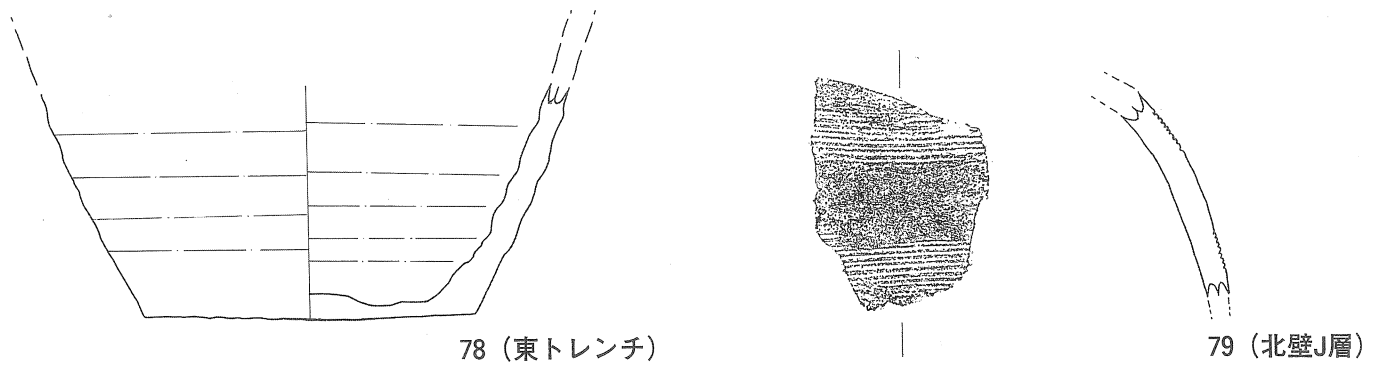
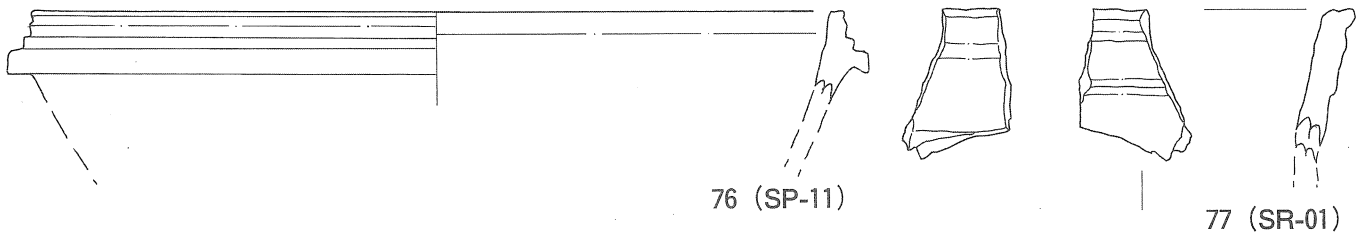
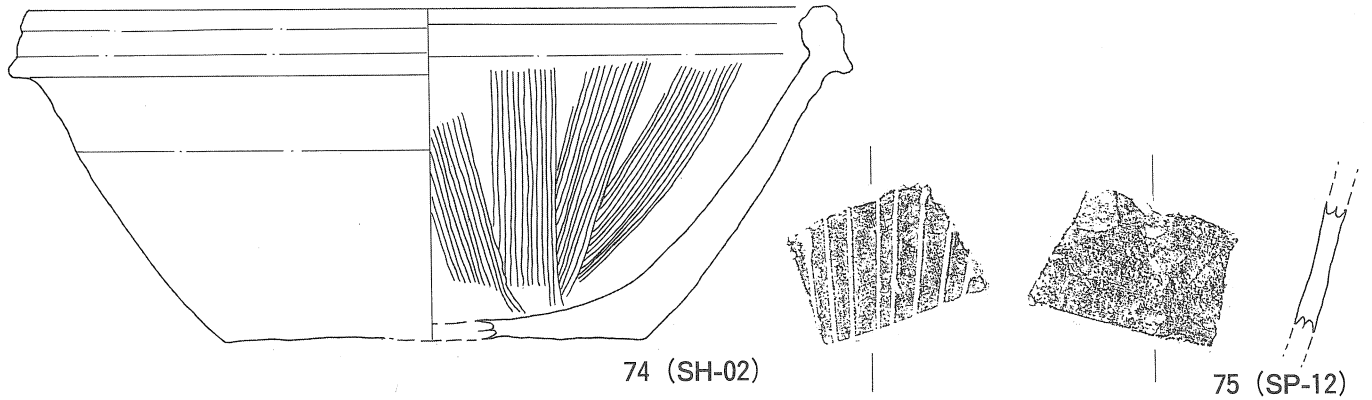
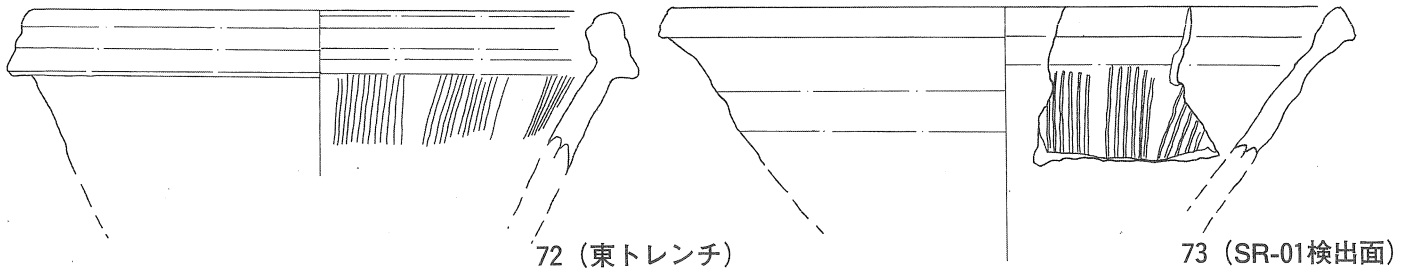
第37図 茨木遺跡(IK06-1) 出土遺物(5)



第38図 茨木遺跡 (IK06-1) 出土遺物 (6)

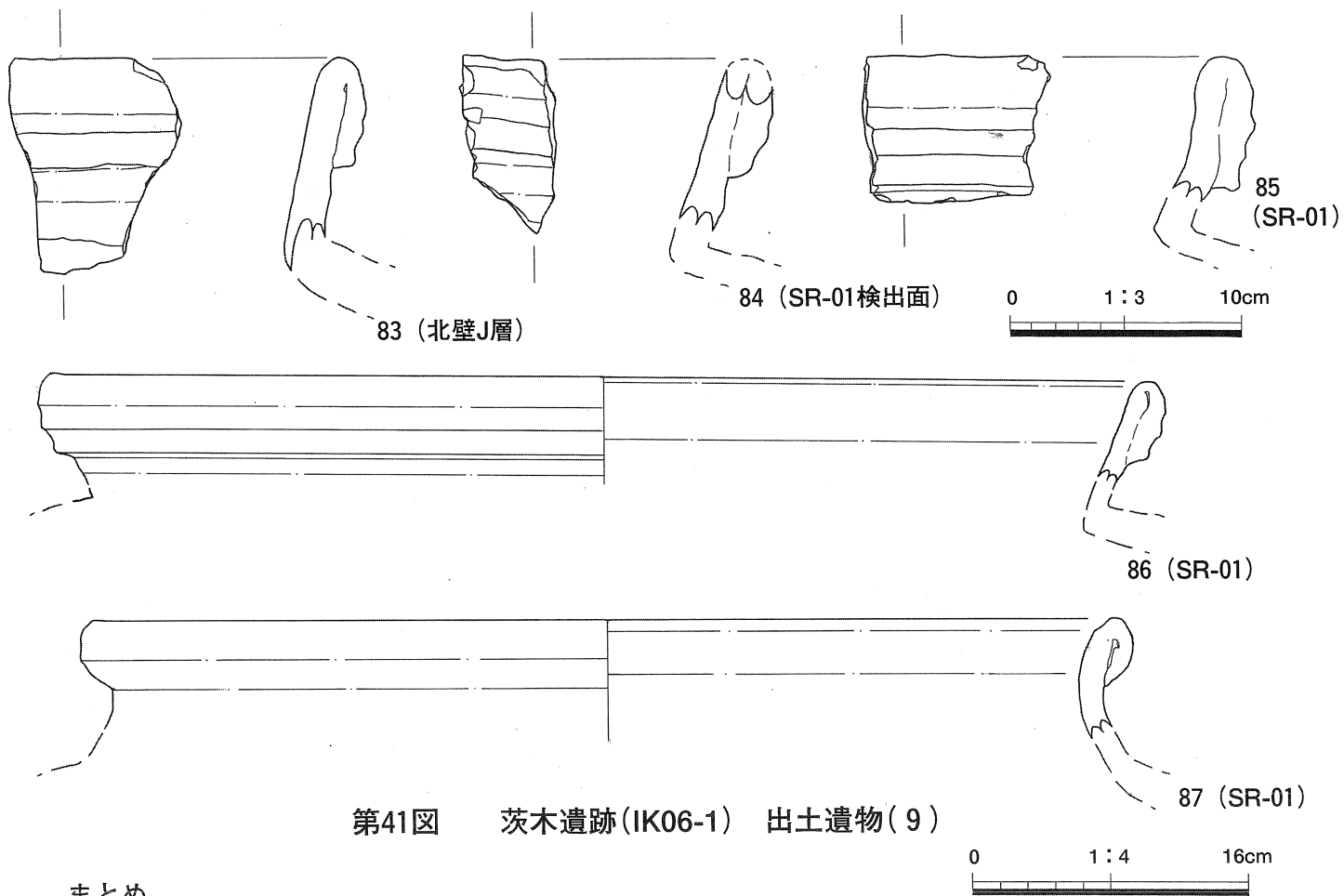


第39図 茨木遺跡(IK06-1) 出土遺物(7)



第40図 茨木遺跡(IK06-1) 出土遺物(8)

0 1:3 10cm



#### まとめ

以上のようなことから、茨木遺跡では古墳時代から先人の足跡が認められたのをはじめ、中世（鎌倉時代以降）からは連綿と現在に至るまで、人々の足跡がはっきりと地面に刻まれてきたことがわかった。当初、当該地は茨木城の東堀と推定されていたが、これまで発掘調査事例が少なかったこともあり、今回の発掘調査はより多くの新しい知見を得る良い機会となった。織豊期～江戸初期？の第3遺構面の流路（SR-1）は、古墳時代・鎌倉時代～室町時代の遺構を壊して北東～南西方向にかけて検出され、流路東側の肩部と流路底面までの深さを確認することが出来た。しかし、流路西側の肩部は調査区外へつづくため流路幅の確認は出来なかった。また、流路（SR-1）から出土した建具の出土状況からは、第3遺構面の流路東斜面に建具が集中して出土している箇所が2カ所確認され、特に南側（南側一括建具）のおさ欄間の出土状況は、明らかに何らかの意図をもって行われたことが伺える。流路堆積状況からも人為堆積が認められ、意図的に埋め戻された状況が想定される。

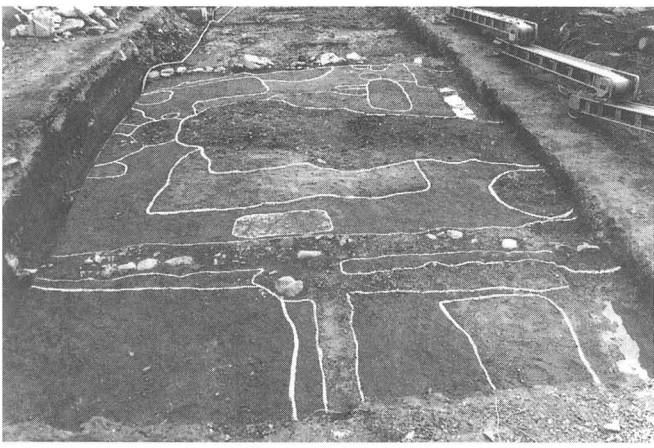
平成18年9月30日に行われた「第53回 大阪府埋蔵文化財研究会」において記念講演をされた伊藤正義氏（文化庁文化財部）からは、今回の茨木遺跡出土の一括建具について破城の一例である可能性がきわめて高いとの評価をいただいた。また、建具に関しては、黒坂貴裕氏（奈良文化財研究所）、当市文化財保護審議会委員 青山賢信氏（大阪工業大学工学部名誉教授）にご教示賜った結果、長さ2.3m、幅0.6mのおさ欄間は、精巧・精緻で格式も高いことなどから、寺院もしくは相応の武家施設のものであった可能性が高いとのことであった。今回の発掘調査では、特に茨木城に直接的に関連すると考えられる遺構と遺物が検出されたことは、大きな成果である。さらに、今後の整理や周辺調査に期待したい。

※ 陶磁器の資料に関しては、松尾信裕氏（(財)大阪市文化財協会会長原調査事務所）にご教授を賜り、誌面ではありますがここに謝意を記します。

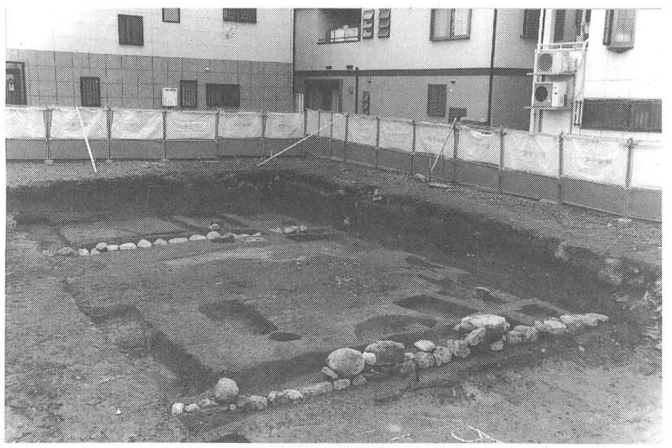


茨木遺跡(1K06-1) 遺物観察表(2)

掲載 番号	遺構名			種類	器種	法量			色調		調整		胎土	焼成	時期	備考	
						器高	口径	底径	外面	内面	外面	内面					
47	北半部	第3面	SR-01	北側	鉄製品	鏽	巾9.5~14.1	厚0.4~1.4	深さ12.8							重さ555g、錆	
48	西トレンチ	第3面	SR-01	石から南側サツレ	陶器	唐津焼くい呑	3.2	6.3	3.6	暗赤褐色~橙褐色	にぶい黄褐色(釉薬)		◎	○	16C末~17C初(慶長~元和)	調整:底部回転糸切、完形	
49	北半部	第3面	SR-01	北側	陶器	唐津向付皿	3.6~			褐灰色	褐灰色	口唇指頭圧痕	◎	○	16C末~17C初		
50	北半部	第3面	SR-01	北側	陶器	皿(白磁)A群	2.0~	(10.8)		灰白色	灰白色	貫入	貫入	◎	○	15C-16C末~17C初	
51	西トレンチ	第3面	SR-01	杭の北側サツレ	陶器	碗	2.3~	(10.5)		灰白色	灰白色	釉薬	釉薬	◎	○	17C前	
52	西トレンチ	第3面	SR-01	杭の北側サツレ	陶器	碗(志野?)	2.9~	(13.3)		鉄釉-黒褐色・長石釉-灰白色	鉄釉-黒褐色・長石釉-灰白色	長石釉貫入	長石釉貫入		○	16~17C	
53	西調査区	北側	SR-01	検出面	磁器	天目茶碗	(5.5~)	(11.2)		明緑灰色-褐色	明緑灰色			◎	○	17C前~中	下1/4鉄釉
54	西調査区	北側	SR-01	検出面	磁器	備前青磁	6.8	(10.7)	5.0	オリーブ灰色	オリーブ灰色	高台砂内外貫入		◎		17C前~中	高台高1.2cm
55	北半部	第3面	SR-01	北側	磁器	青磁蓮弁文碗A群	4.1~			明緑灰色	明緑灰色	釉貫入		◎	○	15C後半~16C	
56	北半部	第3面	SR-01	南側	磁器	青磁蓮弁文碗A群	4.0~		4.8~	オリーブ灰色	オリーブ灰色	貫入	貫入	◎	○	15C末~16C	高台高1.0cm
57	西トレンチ	第3面	SR-01	杭の北側サツレ	磁器	唐津青磁碗	3.3~		4.6	灰オリーブ色	灰オリーブ色	砂目高台	トチン	◎	○	1620~	
58	南半部	第2面	SP-22	埋土	瓦	丸瓦(古手)	全長9.7~	巾5.5~	厚2.5~2.9	灰色	褐色		布目痕	◎	○	15~16C?	胎土:~0.05mm白色粉少含
59	北半部	第2面	SK-16	東側溝内	土師器	羽釜	12.3~	(28.2)		黒色	にぶい黄褐色~にぶい黄褐色	ハケ目	ヘラ削り(体下)ヨコナデ(口縁)	◎	○	16~17C?	胎土:二重構造>1mm雲母やや多、最大径32.0cm
60	北半部	第3面	SR-01	南側	瓦質土器	羽釜	5.5~			灰白色	灰黄褐色	ナデ		◎	○	~16C	胎土:長石~1mm大やや多含
61	南半部	東側溝	SR-01	北端	陶器	備前すり鉢	3.6~			暗赤褐色	暗赤褐色	ロクロ目		◎	○	~16C中	胎土:~0.5mm大白色粗砂少含
62	西トレンチ	南壁断面	Ⅷ層		陶器	備前すり鉢	10.3~			赤黒色	赤黒色		おろし目6本1条セツ	◎	○	16C	胎土:~0.5mm大白色粗砂少含
63	中央部	第3面	SR-01	埋土	陶器	備前すり鉢	4.1~			明赤褐色~灰白色	褐色		4本以上1条(おろし目)	◎	○	~16C中	
64	中央部	第3面	SR-01	埋土	陶器	瀬戸(備前?)すり鉢	3.9~			褐灰色	灰色	ロクロ目		◎	○	15C後半~16C	焼成:歪み有り
65	北半部	第3面	SR-01	南側	陶器	備前すり鉢?				暗赤灰色	暗赤灰色	ロクロ目	7本以上で1条	◎	○	15C末~16C?	
66	北半部	第3面	SR-01	中央	陶器	備前すり鉢	4.8~		(11.0)	褐灰色	黒褐~黒色		9本1条セツ	◎	○	16C?	胎土:~0.5cm大長石やや多含
67	北半部	第3面	SR-01	検出面	陶器	備前すり鉢	6.4~		(11.0)	灰赤~赤褐色	褐色		7本1条セツ2セツ~6-8セツ?	◎	○	15~16C?	胎土:~0.05mm白色粉少含
68	中央部	第3面	SR-01	埋土	瓦質土器	すり鉢	4.7~			黒色	黒色		おろし目7本1条セツ4セツ以上	◎	○	15~16C	
69	西トレンチ	第3面	SR-01	埋土	陶器	堺すり鉢?	7.0~	(42.2)		浅黄褐色~黄褐色	灰赤~暗赤褐色	ロクロ目		◎	○	16C?	胎土:~2mm大白色粗砂少含
70	北半部	第3面	SR-01	北側	陶器	堺すり鉢(丹波)	4.6~			褐色~にぶい赤褐色		ロクロ目	11本1条	○	○	16C末~17C初	
71	南半部	第2面	SP-22	埋土	陶器	堺すり鉢?	5.1~		(13.6)	赤褐色	褐色~灰白色		おろし目11本1条10条前後	○	○	15~16C	胎土:~0.5cm大白色粗砂少含
72	東トレンチ	第2面		南から6m地点	陶器	堺すり鉢?	6.5~	(22.8)		暗赤灰色	赤褐色		おろし目13本1条セツ13~14条	○	○	16~17C	胎土:~1mm大白色粗砂やや多
73	西調査区	北側	SR-01	検出面	陶器	丹波すり鉢	(6.2~)	(26.6)		暗赤褐色	にぶい褐色		8本1条セツ		△	17C前~中	胎土:白色粗砂多~3mm大
74	南半部	第2面	SH-2	(SW区)	陶器	堺すり鉢	13.1	(31.8)	(16.6)	暗赤灰色~赤褐色	赤色~褐色	体下端ヨコナデ・体ナデ	おろし目13本1条セツ20条~	○	○	17~18C?	胎土:~1mm大白色粗砂やや多
75	北半部	第2面	SP-12	埋土	陶器	丹波すり鉢	5.2~			褐色	灰褐色		おろし目1本単位	◎	○	16~17C	
76	南半部	第2面	SP-11	埋土	陶器	丹波すり鉢	3.7~	(31.2)		にぶい褐色	褐色		浅黄褐色・黄褐色のサツイチ	◎	○	江戸	胎土:長石~1mm大やや多含
77	南半部	東側溝	SR-01	北端	陶器	備前甕?	6.0~			暗赤褐色	暗赤褐色	ロクロ目	褐灰色	△	△	~16C中?	胎土:~0.5mm大粗砂(白色少)、焼成一部火彫れ
78	東トレンチ	第2面		南から6m地点	陶器	丹波壺	9.2~		13.2	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ロクロ目	褐灰色・浅黄褐色	○	○	16~17C?	胎土:長石~5mm大多・石英~1mm大多
79	西トレンチ	北壁断面	J層		陶器	備前壺	8.0~			にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	帯(多)状沈線(8本1条)2本	◎	◎	14C後半(南北朝)	胎土:~0.1mm白色粗やや多	
80	北半部	第3面	SR-01	中央	陶器	備前甕	7.1~			暗赤灰色	にぶい赤褐色		◎	◎	16C	胎土:~0.03mm白色粉含	
81	北半部	第3面	SR-01	南半	陶器	備前甕	5.5~			黒褐色	灰赤色		◎	◎	15~16C?	胎土:長石~0.05mm少含	
82	北半部	第3面	SR-01	北半	陶器	備前甕	8.3~			赤黒色	暗赤灰色・褐色		◎	◎	16C	胎土:~0.05mm白色粉少含	
83	西トレンチ	北壁断面	J層		陶器	備前甕	9.2~			暗赤灰色	灰赤色・にぶい赤褐色		◎	◎	16C?	胎土:~0.05mm白色粉やや多含	
84	中央部	東側	SR-01	検出面	陶器	備前甕	7.0~			灰赤色	灰赤色		◎	◎	~16C?	胎土:~0.03mm大白色粉少含	
85	北半部	第2面	SR-01	南端	陶器	備前甕	6.0~			暗赤灰色・灰赤色	暗赤灰色・灰赤色		◎	◎	16C末~17C初	胎土:~0.5mm大白色粗多含、口唇部自然釉	
86	北半部	第3面	SR-01	埋土	陶器	備前甕	6.2~	(62.4)		暗赤灰~赤褐色	灰赤色		◎	◎	16~17C	胎土:~0.05mm白色粉多含	
87	北半部	第3面	SR-01	南側	陶器	備前甕	6.8~	(57.6~)		にぶい褐色・灰白色			◎	◎	~16C	胎土:石英・長石~1mm大少含、色調:自然釉	



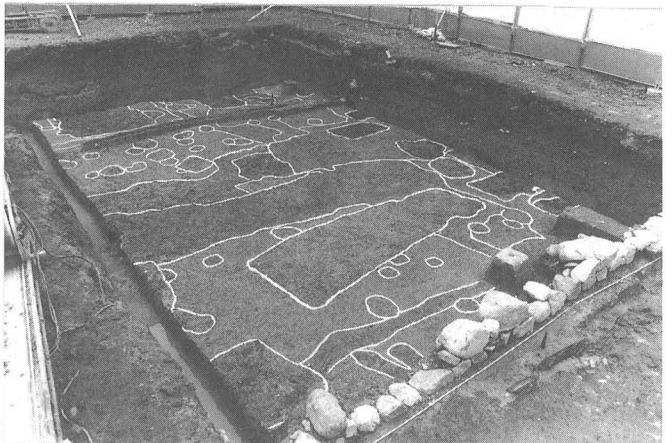
第1面 検出状況全景（南から）



第1面 完掘状況全景（北東から）



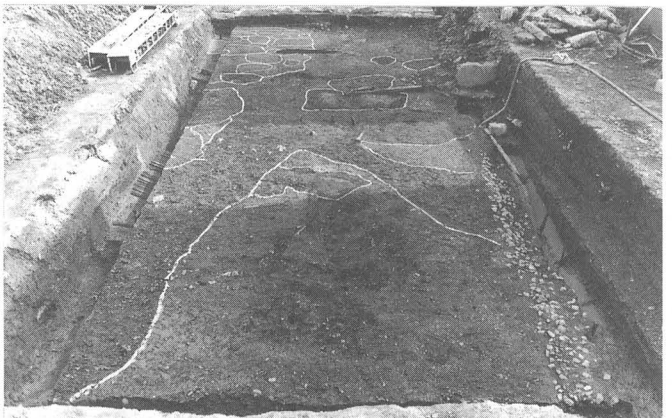
第1面 SK（土坑）-4全景（東から）



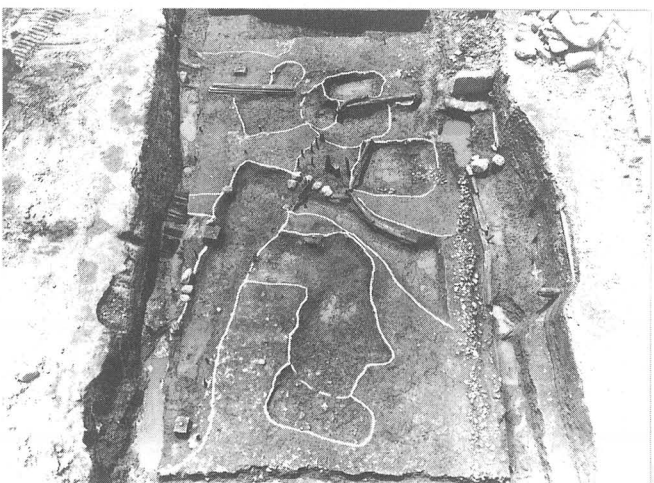
第2～4面 南半部検出状況全景（北東から）



第2～4面 南半部完掘状況全景（南から）



第2面 北半部検出状況全景（北から）



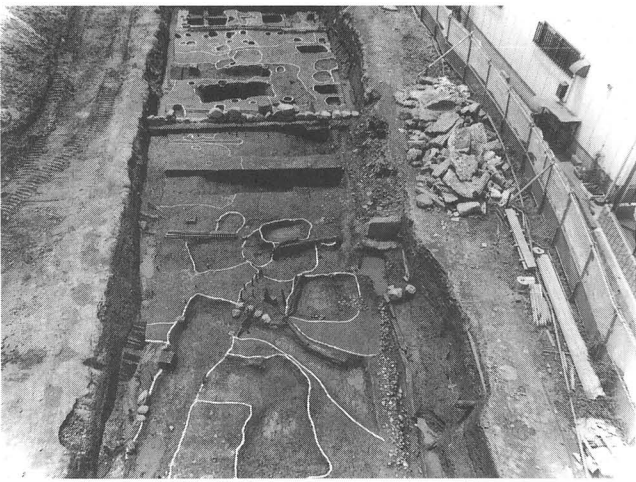
第2面 北半部完掘状況全景（北から）



第2面 SF（石壘）-1・水路全景（北から）

第42図 茨木遺跡(1K06-1)(1)

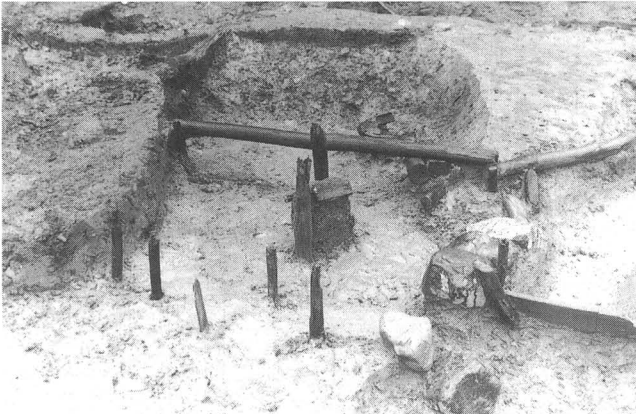




第2面 完掘状況全景（北から）



第2面 北半部水路 SF-1 全景（南東から）



第2面 北半部 SD3・SK12全景（東から）



第2面 北半部 SD3・4合流部状況（東から）



第2面 SK（土坑）-12 遺物出土状況（南から）



第2面 SK（土坑）-12 遺物出土状況（東から）



第2面 東トレンチ全景（北から）



第2面 東トレンチ木組全景（東から）

第43図 茨木遺跡(IK06-1)(2)



第3面 流路内遺物検出状況（北から）



第3面 流路内遺物検出状況（西から）

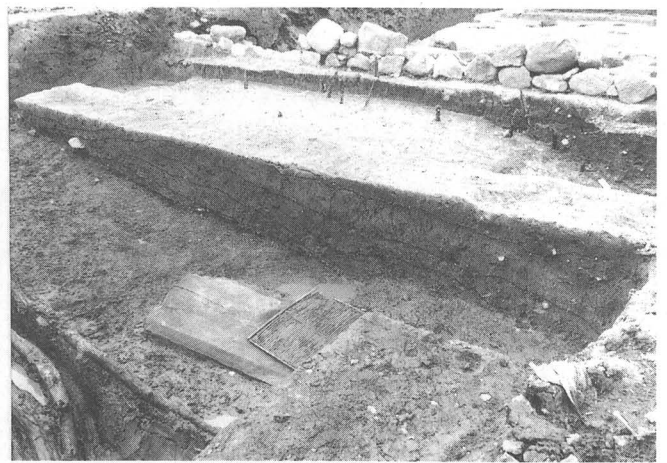


第3面 流路内建具検出状況（北から）

第44図 茨木遺跡(1K06-1)(3)



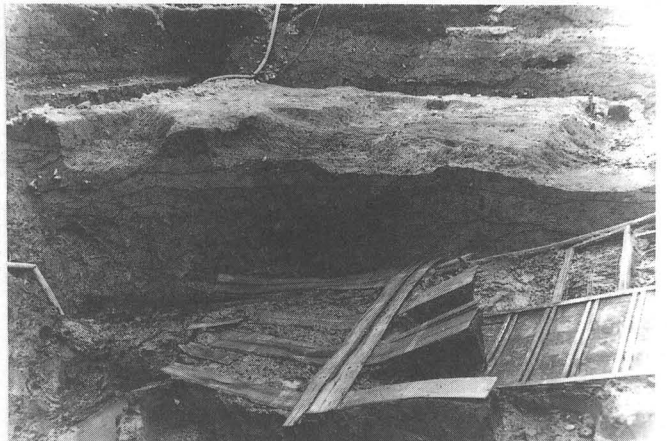
第3面 流路南側建具他遺物検出状況（北から）



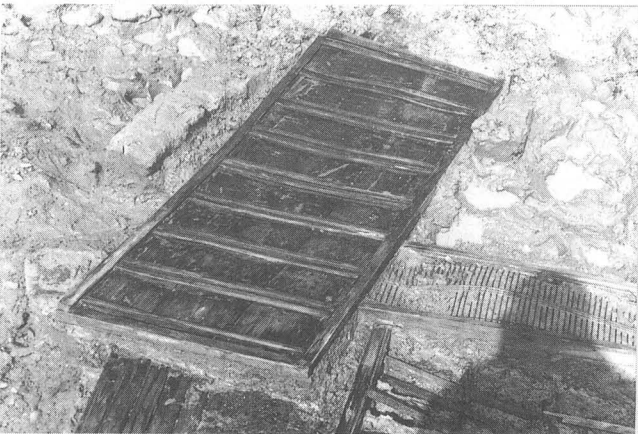
第3面 トレンチ南側流路土層断面（北西から）



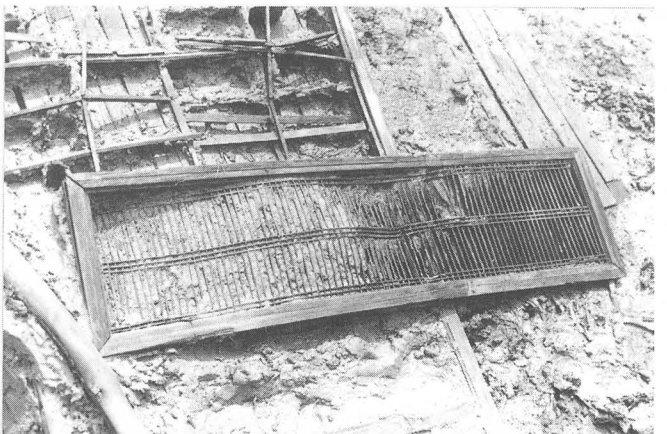
第3面 トレンチ北側流路土層断面（南東から）



第3面 流路内建具 壁板材? 出土状況（南から）



第3面 流路内建具 障り戸出土状況（北東から）



第3面 流路内建具 おさ欄間出土状況（西から）

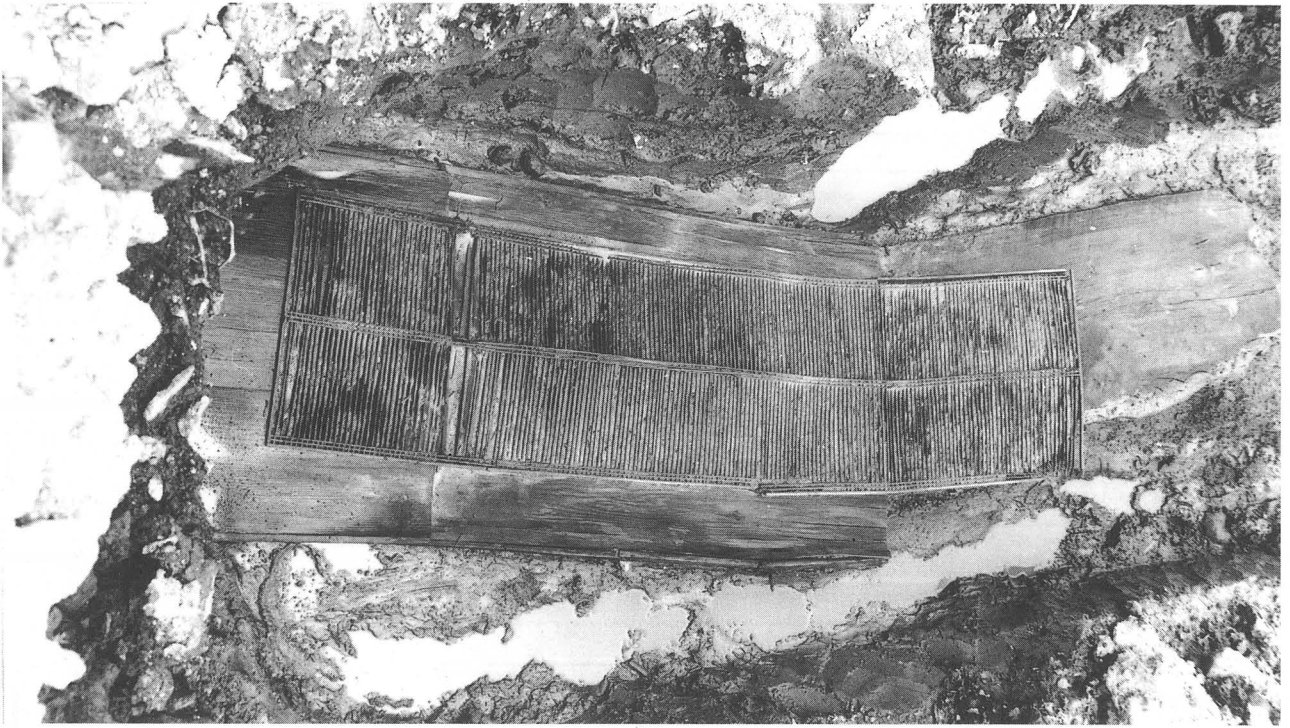


第3面 流路内建具 障子出土状況（東から）



第3面 流路内建具 床板材? 出土状況（北から）

第45図 茨木遺跡(IK06-1)(4)



第3面 流路内建具出土状況（南から）  
（おさ欄間：遣り戸2枚：板材）



第3面 流路内建具出土状況（西から）

第46図 茨木遺跡(İK06-1)(5)

# 中条小学校遺跡

所在地 茨木市駅前一丁目310-4、  
310-18、310-19

開発事業 店舗兼住宅建設事業

調査期間 平成18年5月1日～平成18年5月19日

調査面積 147㎡

調査担当 宮本 賢治

## 調査結果

中条小学校遺跡は、新中条町の中条小学校を中心に、南北約0.8km×東西に約0.4kmの西中条町・下中条町・小川町にかけて南北細長く広がる、弥生時代中期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。

今回の調査地は、中条小学校遺跡の北西限付近にあたる場所で、中条小学校遺跡の南方には近年小銅鐸が出土した弥生時代前期から中・近世頃にかけての複合遺跡である東奈良遺跡があり、北方のやや東寄りの場所には、弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。

中条小学校遺跡の当市教委による既往の調査からは、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡を中心とした住居跡や群集墳などの古墳が多く見られる。また、その後の空白時期において平安時代中期から後期頃の黒色土器碗A類や同B類といった遺物も出土している。

なお、中条小学校遺跡の本発掘調査の初現は昭和51年に実施されており、その際に弥生時代中期後半の柱穴遺構や井戸、同時期の土器が検出されている。昭和51年から今回の調査に至るまでに大小取り混ぜて約30箇所の場合において、本発掘調査が実施されている。

近年においては、平成15年度に新中条町における調査で、弥生時代後期・後期後半～古墳時代初頭、古墳時代後期初頭～後期後半、飛鳥時代中頃、奈良時代後半～平安時代前期前葉、平安時代後期の遺構が同一面において検出されている。このことから、複合遺跡の一端を表している事が分かる。

調査は、まず調査区の北半部（調査区北部）を掘削して、調査終了後に南側（調査区南部）を調査する反転調査の方法を採った。

今回の調査においては、平安時代を主とした中世中頃に営まれた生活面を調査の対象とした。

## 基本層序

基本層序については、第1層～第6層に大別することができる。上層より順に、現代盛土層（既存建物の基礎などの攪乱を含む。約50cm）、旧耕土（約10cm）、床土（約5cm）、自然層（オ



位置図

リーブ色砂質土SCL5Y4/2、約10cm)、中世遺物包含層(灰オリーブ色砂質土SCL5Y5/2、約15cm)、地山層(黄褐色粘土HC10YR5/8)に分けることができる。

#### 検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、ピット状遺構12基、土塚遺構10基(内、土塚群9基を含む)、不定形遺構1基である。この他に調査区北部及び同南部の東側部分において、小動物(有蹄類)の足跡遺構を116個検出した。これらの足跡が検出された場所は調査区のほぼ中央付近から東側にかけて、自然の落ち込み状に集中しており、土質の状況から低湿地帯であったと考えられる。

調査区南部の西側部分においては、土塚遺構が9基まとまって出土している。これらの土塚の平均の規模は、長軸約80cm×短軸約50cm、深さ約20cmである。また、この内の6基は土塚遺構の中心軸が真北方向より、約20°西方向にずれて造られていることが分かった。この6基の土塚はほぼ同じ規模で造られているが、土塚からは遺物がほとんど出土していないので、造成された時期や意図は不明である。

#### 出土遺物

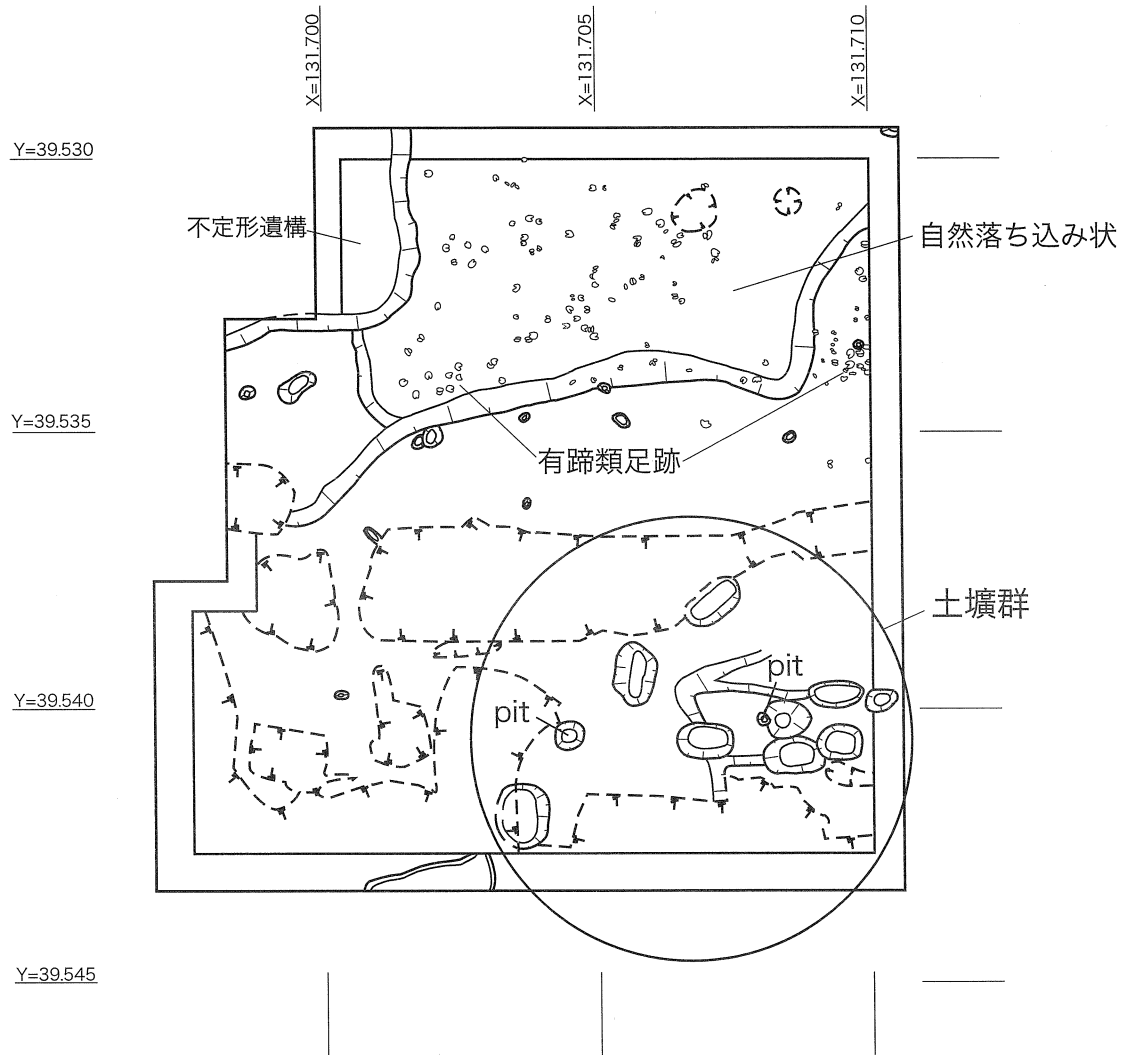
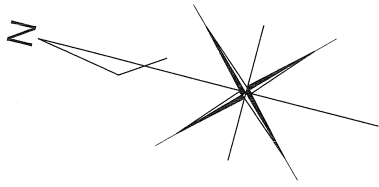
今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14×横36×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、中世頃の土師皿、陶磁器や瓦などの遺物が出土している。

#### まとめ

今回の調査では、平安時代を主とした中世中頃の遺構を検出した。当地は中条小学校遺跡の包蔵地の北西端付近に位置しており、集落のはずれに当たる場所によることからか、遺物や遺構の数は少なかった。

#### 参考文献

茨木市教育委員会『平成15年度発掘調査概報』平成16年3月



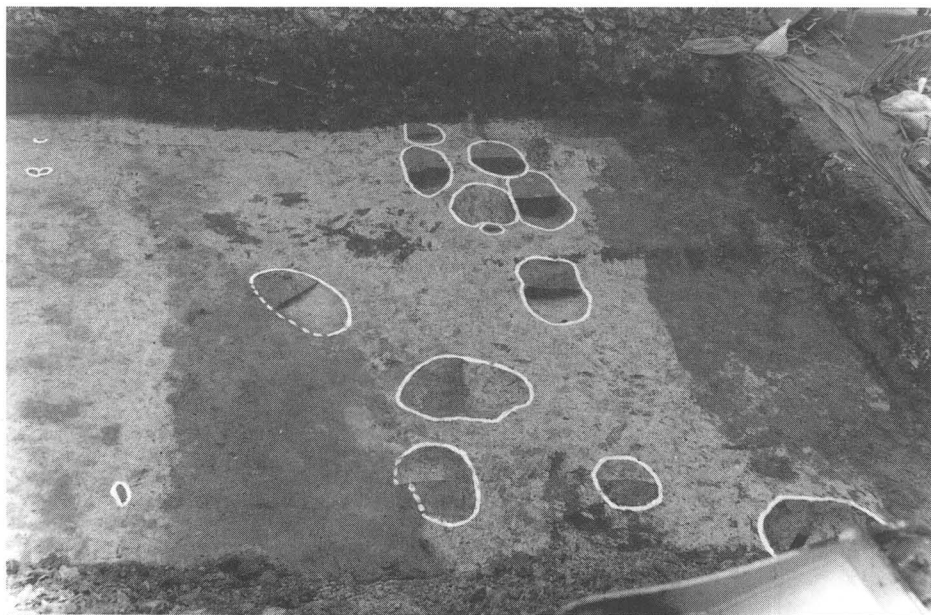
第47図 中条小学校遺跡 遺構平面図



調査区北部 遺構面完掘状況（西から）



調査区南部 遺構面完掘状況（西から）



調査区南部 土壌群完掘状況（北から）

第48図 中条小学校遺跡 遺構面完掘状況



# 東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良二丁目130・131

調査原因 マンション新築工事

調査期間 平成18年6月19日～8月7日

調査面積 約470㎡

調査担当 中東正之

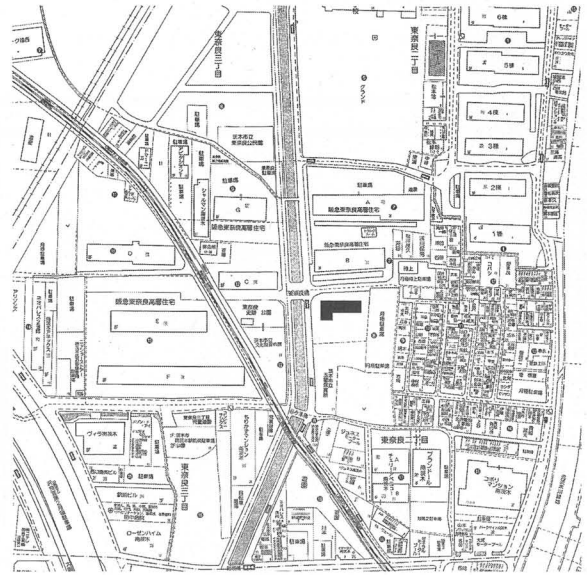
## 調査結果

東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した沖積面に成立している。昭和46年、小川水路の改修工事の際して遺跡が発見されて以来、多くの発掘調査が実施され、弥生時代の環濠集落をはじめとする弥生時代前期から中世に至る複合遺跡として、南北約1.2km、東西約1kmの包蔵範囲が周知されている。

本調査は、小川水路の東側に位置する阪急電鉄社員寮跡地の再開発に伴うものである。同社員寮は、遺跡発見から間もない昭和46年7月に建設に伴う発掘調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代にかけての溝状遺構、円形大形土壇、袋状土壇などが検出されている。今回の調査範囲は、マンション建設予定地のうち、旧調査範囲を除いた部分である。調査区は東西に分け、西側を先行する反転調査とした。

基本層序は、北壁断面の観察を基とした。上層から順に、現代盛土層（第1層1.4m）、旧耕土層（第2層約0.2m）、旧床土層（第3層約0.2m）、灰色砂と灰色シルト質粘土の互層（第4層0.2～0.4m）、中世までの遺物を含む灰色粘土（第5層0.2～0.3m）、第5層と第7層の混合層（第6層0.2～0.3m）、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物を含み、腐植質の黑色粘土層（第7層0.2～0.3m）、地山層である明黄褐色粘質土（第8層）となる。概して低湿な層相を示すが、現在の地下水位は低い状態にあるとみられ、地下水由来のグライ化は認められない。また、第6層は、断面をみると火炎状に上方に吹き上がる構造を有しており、地震痕跡（液状化現象）の可能性も考えられる。遺構検出は、第7層上面を第1検出面とした。腐植質に富む第7層は、湿地状に澱んだような層相を呈している。土器類は多くはないが、流木などの植物遺体を多量に包含し、木製品の破片も見受けられる。この傾向は、調査区の中央から西側にかけてより顕著である。第7層を除いた第8層上面では、明瞭な生活面が成立しており、これを第2検出面とした。

第1遺構面は、現地表面下約2.8m、標高約5.5mを測る平坦面である。南北方向の溝群、浅い土壇、ピット、足跡などがある。本来の成立面より削平しているため、各遺構の性格は判然とし



位置図

ない。水田や耕作地としての土地利用が考えられ、一部には畦畔状の高まりがみられたが、調査範囲が狭いため、確認するに至らなかった。SD-1を除いて、時期比定に適う遺物は出土しなかったが、中世のはじめ頃の生活面と考えられる。SD-1は、幅約3～4m、深さ0.3m程度を測る南北溝である。埋土には、摩滅した弥生土器片を主体に、土師器坏皿類の破片など、平安時代から中世の遺物が混入する。

第2遺構面は、標高5.2～5.4mを測り、小川水路に近い西側が微高を呈する。溝、円形土坑、貯蔵穴、柱穴、ピットなどがある。時期は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭を主体とする。以下、主要な遺構について概説する。

SD-3、SD-3'は、北西から南東方向への流路である。SD-3埋没後、これに重複してSD-3'が流れたものとみられる。SD-3は、幅約4.5m、深さ0.6m程度を測る。埋土は3層に分かれ、弥生時代後期（畿内V様式）から古墳時代前期初頭（庄内並行期）の土器片や流木、木製品片などが多く出土した。SD-3'は、幅約1m、深さ0.3～0.4mにまで規模を減じる。埋土は3層に分かれ、古墳時代前期初頭から古墳時代後期頃の土器片が出土している。また、SD-3最上面では、叩き締められたように砕かれた土器片が多量に散布する。埋没流路を均す施工と考えられる。

土坑は、20基以上が検出されている。そのうち、上面径1.3m以上、深さ50cm以上を測る大形の円形土坑は、14基を数える。また、大形円形土坑の半数程が、袋状もしくは、その傾向を有する土坑である。SD-3、SD-3'東肩部に連なるSK-11、12、13および、調査区東側に位置するSK-3は、とくに大形の袋状を呈する土坑で、上面径2m以上、深さ0.6～0.8mを測る。強い粘土質の地山層を掘り込んだ坑内は、充満した黒色腐植土に地山が混入した3～4層に分かれる。遺物は、SK-12で弥生時代後期から庄内並行期の土器や加工木などがまとまって出土している。SK-11、13およびSK-3の出土遺物も同傾向ながら、その量は少ない。また、SD-3、3'の開削で切られた、大形とみられる土坑が数基ある。このあたりに大形円形土坑が密に並び、一群を成していたものと考えられる。大形の土坑の一部には、その最上面に、SD-3における施工と同様の、砕かれた土器片が散布する。

調査区中央部付近には、上面径1～1.5m、深さ0.4～0.6mを測る円形土坑8基程が一群を成す。SK-6、7、8、15など、比較的大形のものには袋状の堀方を呈する。埋土はいずれも黒色の腐植土に地山層が混入し、弥生時代後期を主体とする土器片が出土した。土坑群における遺物は、全般に少ない。調査区東側には、貯蔵穴とみられるSK-5がある。上面径1.3m、深さ0.5mを測る坑内は、袋状こそ呈していないものの、横倒しのかたちで出土した弥生後期から庄内並行期の完形瓶類の内外に、炭化した木の実や植物繊維などが詰められていた。

ピット類は、調査区東側において、掘立柱建物や柱列を構成しうる並びがみられたが、確定するに至らなかった。一部には柱根の残る柱穴もあり、建物が存在した可能性がある。

包含層の遺物は、流木などの植物遺体や加工木、木製品片を多く含むが、土器類は、やや少ない。そのほとんどが、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の壺、瓶、鉢、高杯、器台などの破片

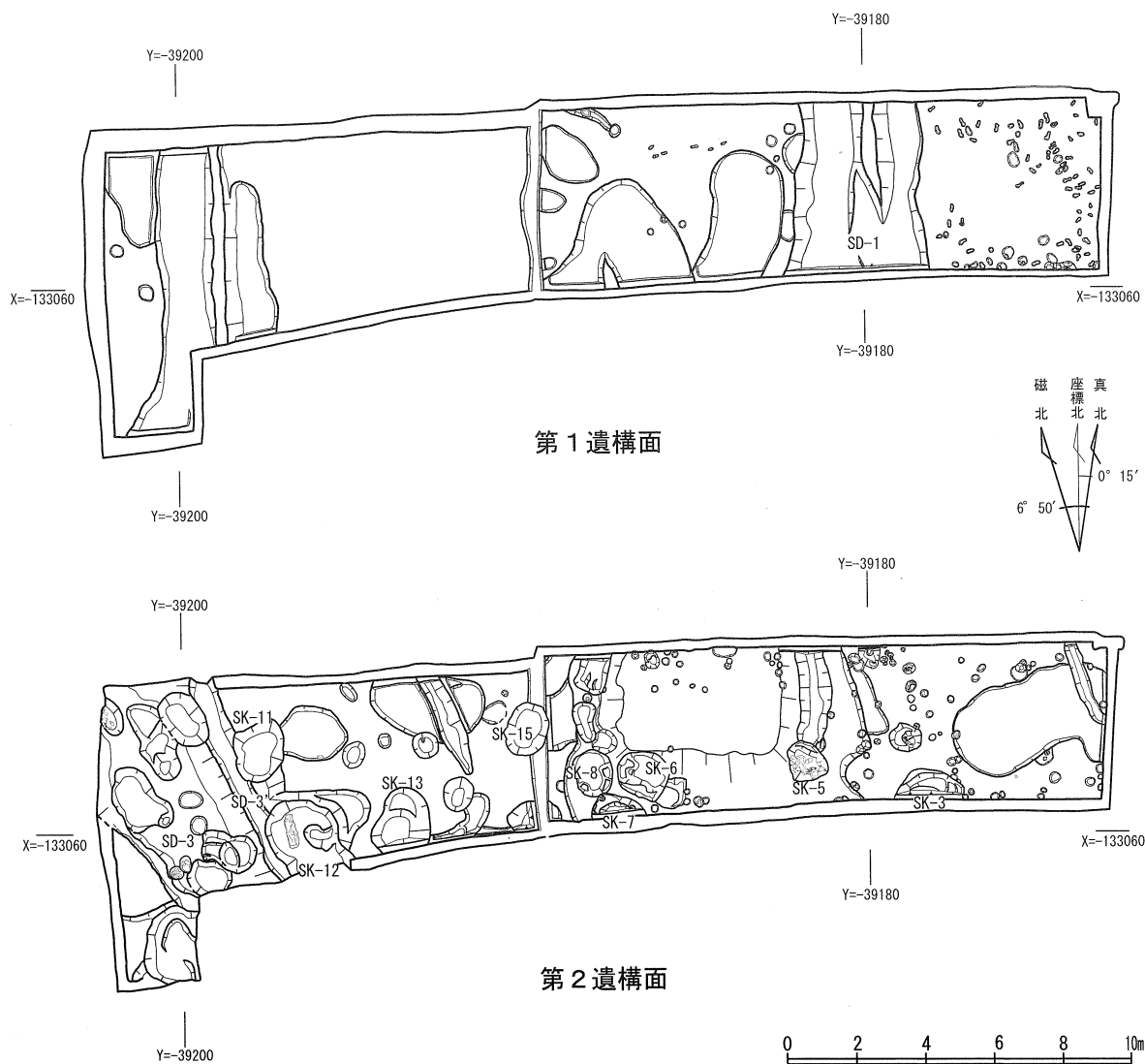
であるが、古墳時代後期から中世の土器類の細片も混入する。

環濠集落が立地する扇状地性平坦面から小川水路（旧流路）を隔てた、やや低い沖積面である本調査地では、弥生時代後期（畿内V様式）から古墳時代前期初頭（庄内並行期）の円形土坑群などを検出した。粘土質の地山に袋状に掘り込まれたものが多く、貯蔵穴としての用途であったと考えられる。内部は、木の実等が加水分解したものとみられる炭化物を多少とも含んでいるが、相応に充実した遺物を有するものはSK-5のみであった。土坑群は、さほどの存続期間を経ずに、SD-3が開削されるなどして埋没しはじめ、やがて湿地状に澱んだ堆積層に覆われている。その後長い期間、湿地などの空閑地となっていた可能性が高く、耕作などの営為が加えられるのは、中世以降であったと考えられる。

参考

東奈良遺跡調査会「東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ」

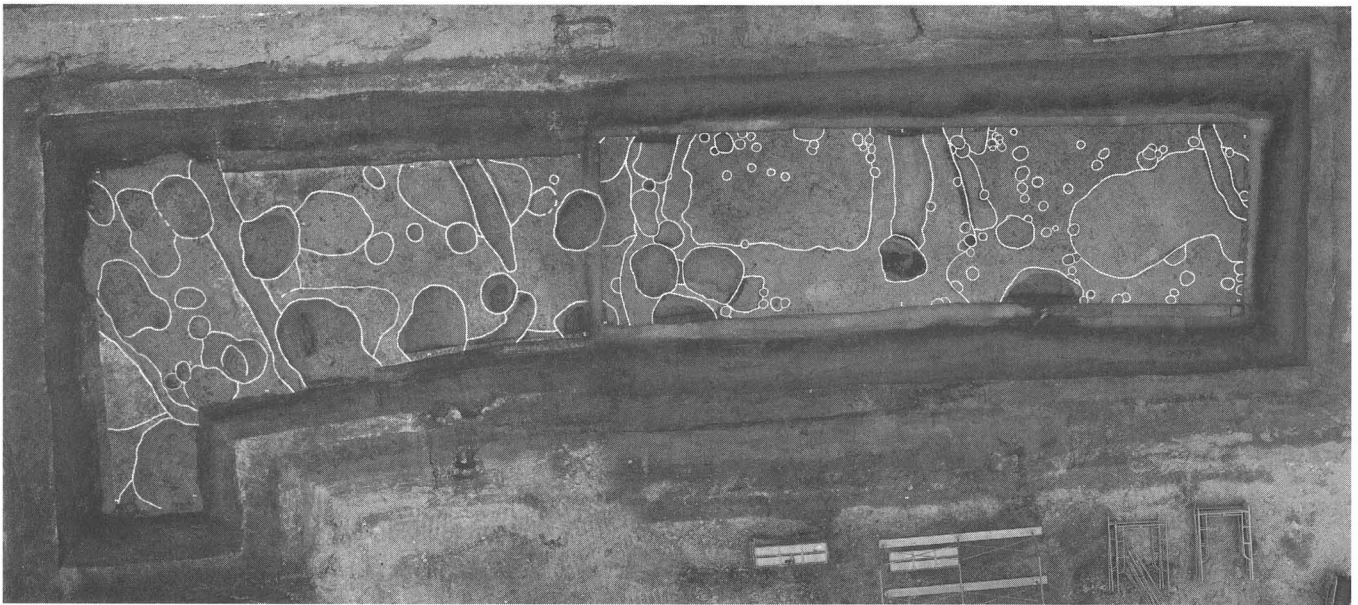
茨木市教育委員会「平成17年度発掘調査概報」



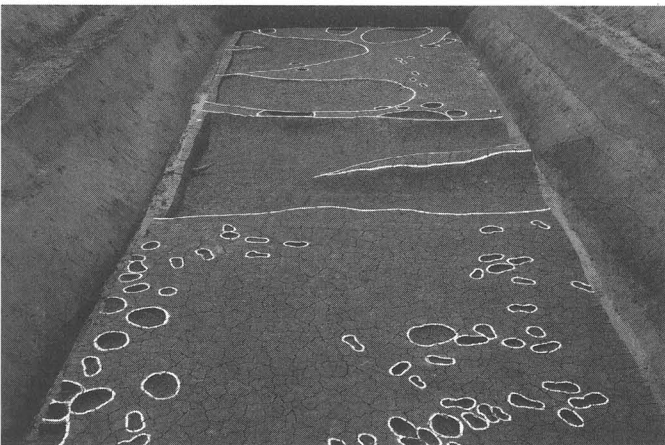
第49図 東奈良遺跡遺構平面図



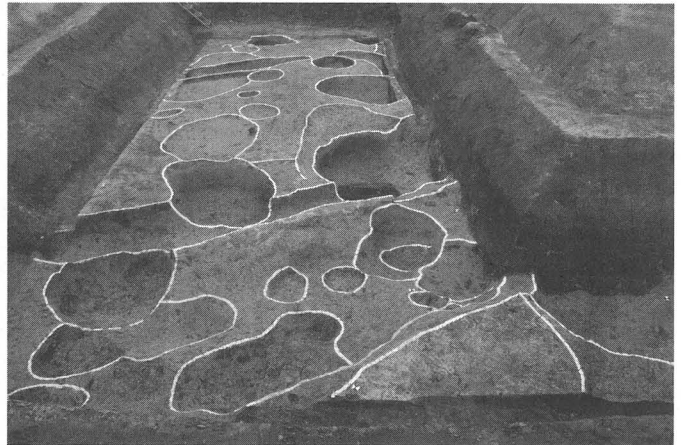
第1遺構面全景



第2遺構面全景



第1遺構面（東から）



第2遺構面（西から）

第50図 東奈良遺跡完掘状況

# 中条小学校遺跡

所在地 茨木市下中条町62-2

開発事業 社員寮建設事業

調査期間 平成18年7月13日～平成18年8月26日

調査面積 349㎡

調査担当 宮本 賢治

## 調査結果

中条小学校遺跡は、新中条町の中条小学校を中心に、南北約0.8km×東西約0.4kmの西中条町・下中条町・小川町にかけて南北に細長く広がる、弥生時代中期から中世にかけて継続的に営まれた複合的な集落遺跡である。

今回の調査地は、中条小学校遺跡のほぼ中央に位置しており、南方には近年小銅鐸が出土した弥生時代前期から中・近世頃にかけての集落である東奈良遺跡があり、北方には弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての住居跡がみられる駅前遺跡が存在する。

中条小学校遺跡の当市教委による既往の調査からは、古墳時代中期頃の掘立柱建物跡を中心とした住居跡や群集墳などの古墳が多く見られる。また、その後の空白時期において平安時代中期から後期頃の黒色土器碗A類や同B類も出土している。この調査地は、中条小学校遺跡として最初に調査が行なわれた中条小学校からは、北東約140m先の場所に位置している。

調査方法は、敷地面積が調査面積に対して広いことから、全面を一括して掘削していくこととした。但し、調査面積の南側の約1/3強が以前建てられていた社宅寮の既存建物の基礎などにより攪乱を受けていた。

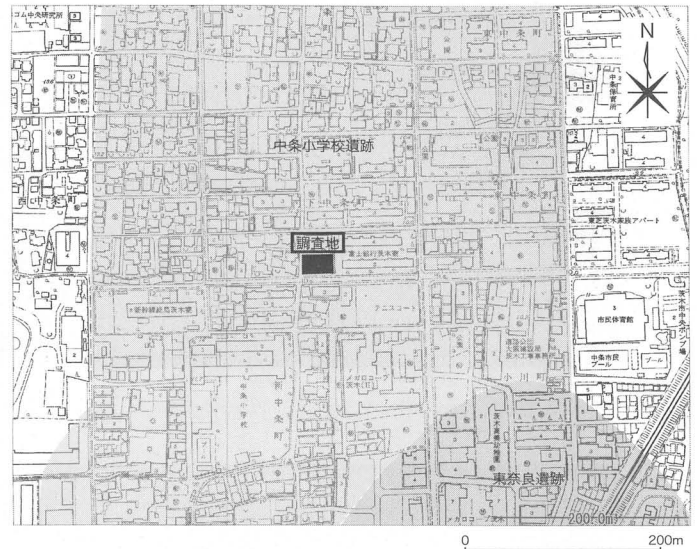
今回の調査においては、主に弥生時代後期から古墳時代を中心に営まれた集落の生活面を調査の対象とした。

## 基本層序

基本層序については、第1層～第6層に大別する事ができる。上層より順に、現代の盛土層（調査区西側部分一約50cm、同東側部分一約70cm、既存建物基礎による攪乱・造成盛土を含む）、旧耕土（約10cm）、床土（約5cm）、中世遺物包含層（暗灰黄色砂質土SL2.5Y 5/2に明褐色砂質土SL7.5YR 5/8が混じる。約5cm）、弥生時代後期～古代遺物包含層（明黄褐色砂質土SL2.5Y 6/6）、地山層（黄褐色砂質土SL10YR 5/6）に分けることができる。

## 検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、柱穴（ピット）遺構約170基、溝状遺構27条、土壇遺



位置図

構15基、井戸遺構1基、竪穴住居跡1棟、円形周溝遺構2基である。

この内、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期（庄内併行期）の円形周溝遺構については、中条小学校遺跡の調査においてたびたび検出されているが、内部構造については不明な点が多い。今回の調査からは、円形周溝遺構の溝内及び周溝内部より、小さいもので直径4cm、大きなもので直径10cmほどのピット状遺構が数多く検出されている※。

これらの遺構は、円形周溝の内側から外側に向かって斜めに入るようになっていた。周溝内の底の部分において検出してみたところ、その面より約3cm、一番深いもので約15cmの丸いくぼみを検出した。これらのピット状遺構は、掘削したというよりも先の丸い棒状のようなものを押し当ててへこんだような感じである。この事からピットとして掘り込んだものではなく、くぼみ状遺構として捉えたいと考えている。

また、円形周溝内において竪穴住居跡を1棟検出している。この事から前述のくぼみ状遺構は、竪穴住居の構造物の一つである「垂木」を支えた柄穴のようなものだと考えられる。以上のことから、今回検出された円形周溝遺構については、竪穴住居に関連した施設の可能性があるものと考えている。

なお、くぼみ状遺構のそのほとんどは、円形周溝の内側に集中して検出された。

#### 出土遺物

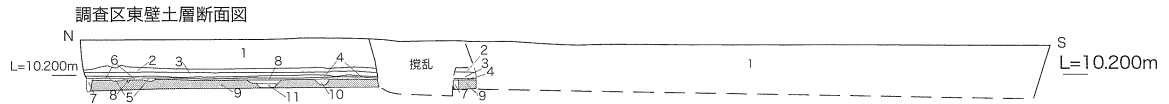
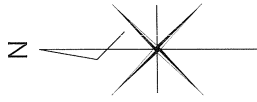
今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド（縦14×横36×奥行き56cm）に換算して7箱分である。その種類と内訳は、古墳時代の須恵器や平安時代の須恵器、土師皿などである。

#### まとめ

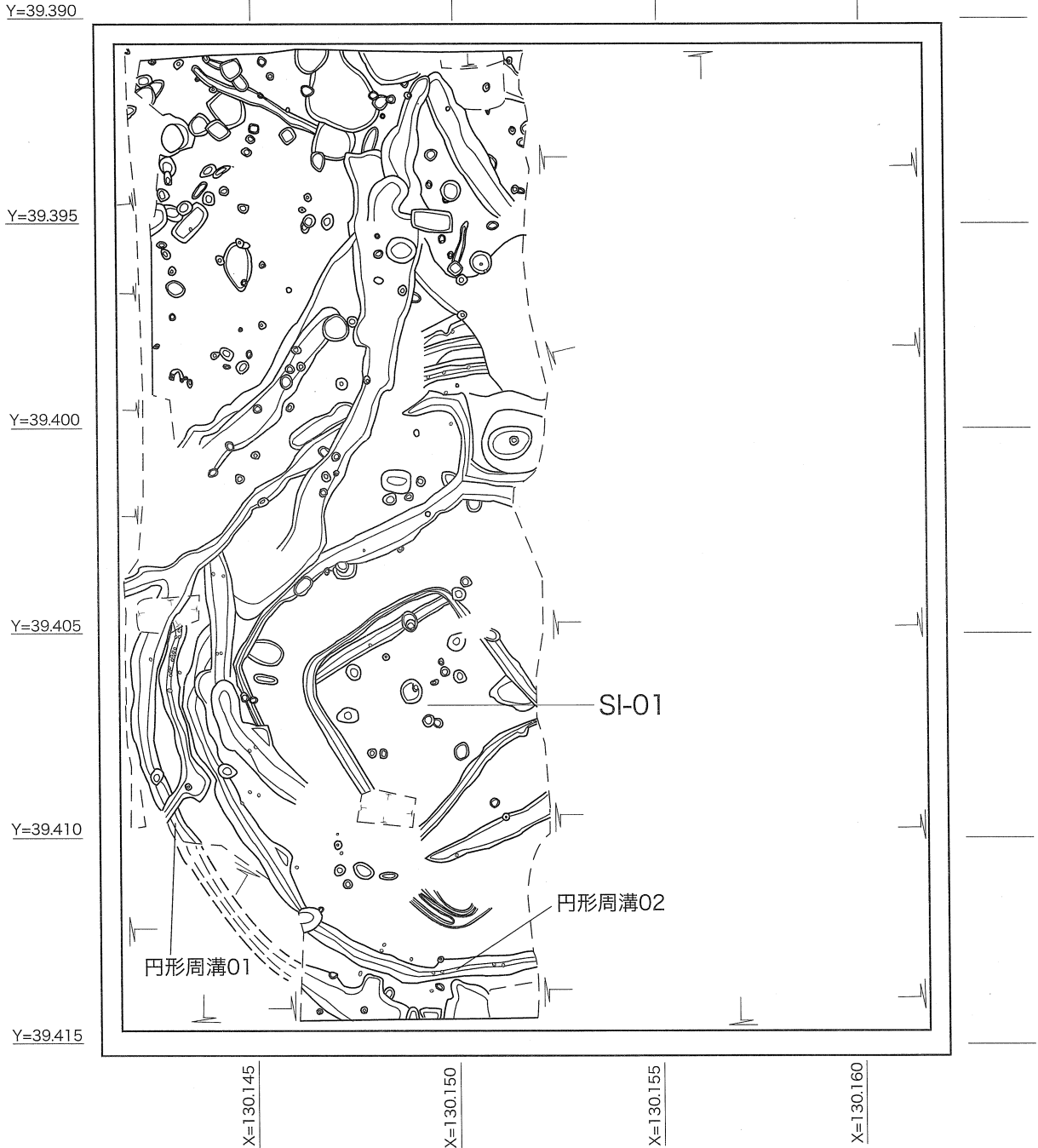
今回の調査から、弥生時代の後期頃から古墳時代初頭にかけての竪穴住居や円形周溝などの遺構を検出した。なお、既往の調査より今回の調査地より南西に約140mにおいて円墳が検出されている。この事から今回の調査地は、この時代では南の墓域に対して居住域に相当する地域だと考えている。

#### 参考文献

茨木市教育委員会『平成15年度発掘調査概報』平成16年3月



- |  |                                 |
|--|---------------------------------|
| 1. 盛土 (造成盛土)                                       | 6. 明黄褐色砂質土 (SL2.5Y6/6) ※古代遺物包含層 |
| 2. 旧耕土   | 7. 褐灰色粘土 (HC10YR4/1)            |
| 3. 床土  | 8. 褐灰色砂質土 (SL10YR5/1) ※遺構埋土     |
| 4. 暗灰黄色砂質土 (SL2.5Y5/2) に明褐色砂質土 (SL7.5YR5/8) ※土器含む。 | 9. 黄褐色砂質土 (SL10YR5/6) ※地山層      |
| 5. 褐灰色粘質土 (SC7.5YR5/1) に褐色粘質土 (7.5YR4/6)           | 10. 灰黄褐色砂質土 (SL10YR5/2) ※遺構埋土   |



第51図 中条小学校遺跡 遺構平面図及び東壁土層断面図



調査区東部 遺構面完掘状況（北から）



調査区西部 遺構面完掘状況（北から）



竪穴住居跡 完掘状況全景（西から）

第52図 中条小学校遺跡 遺構面完掘状況



# 東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目

384-1・371-1

調査原因 共同住宅新築

調査期間 平成18年7月10日～

平成18年8月30日

調査面積 250㎡

調査担当 黒須 靖之

調査結果 東奈良遺跡は茨木市南部の

標高6～8mの沖積平野上に位置し、地形的に北西から南東方向に向かって緩やかな傾きを持っている。約南北1.2km、東西1kmの遺跡範囲で弥生時代前期の拠点集落として周知されている。近年、東奈良区画整理事業に伴う道路部分の発掘調査を皮切りに区画内の用地を中心に周辺の調査が増加している。今回の調査は市道平田線沿いの共同住宅を新築するため、事前に発掘調査を実施したものである。

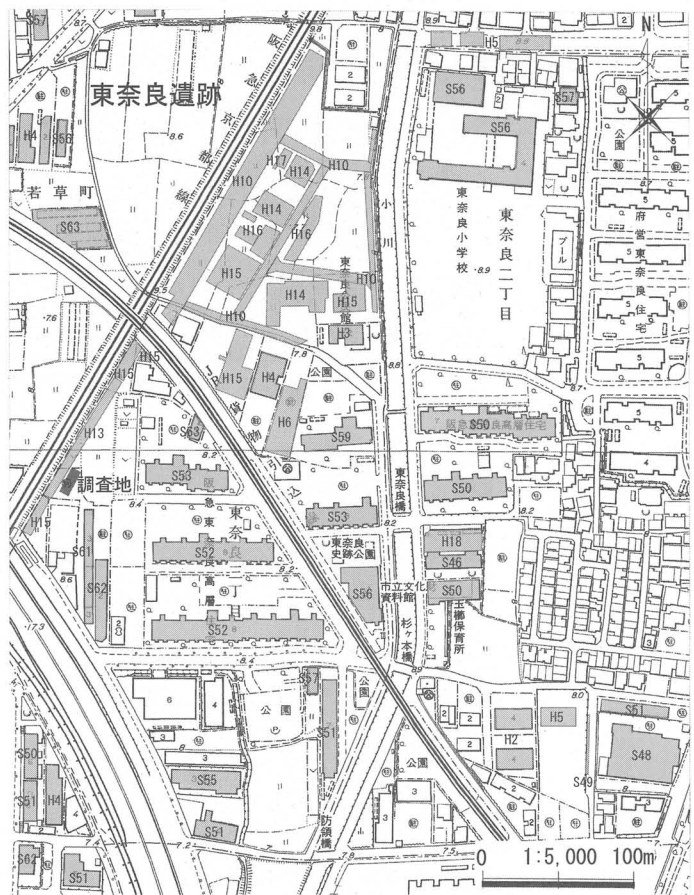
今回の調査では主に古墳時代中期～後期を主体とする面、弥生時代前期から古墳時代前期を主体とする面で遺構検出および精査を行った。

## 検出遺構

今回検出された主な遺構は以下のとおりである。第1面の古墳時代中期～後期の須恵器坏身が出土したSD-01上層遺構を中心に溝(SD)や土坑(SK)、柱穴(SP)が確認された。次に弥生時代前期～古墳時代前期初頭を主とした面では、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃(庄内式併行期)の北西-南東方向の大溝(SD-01下層遺構)、土坑20基、溝約13条、柱穴約200口を精査している。今回の調査では、第2面で検出された土坑群のほとんどは、出土遺物から弥生時代中期の遺構と思われる。等高線に沿う形で谷沿いに検出されている。弥生時代前期に属する遺構群は、溝(SD-103・106・108)・土坑(SK-101)・柱穴群などであるが、大半が前期後半段階に属するものである。

## 基本層序

調査区の基本層序はI層からX層まで大別される。I層が表土で0.2～0.6mの現代の盛土である。II層は明青灰色シルトを主体とした近現代の耕作土で、層厚0.1～0.2mをはかる。III層はIII-1～4層まで細分でき、褐灰色土・シルト・粘土を主体とし灰白色シルトを含んだ古代遺物包含層で、層厚0.05～0.2mをはかる。V層はV-0～5層まで細分でき、にぶい黄橙色砂壤土や褐灰色シルト～粘土、黒色土～粘土などを主体とした古墳時代～古代までの堆積土で、層厚0～



調査地位置図

0.4mをはかる。V-0～3層は自然堆積で小河川等の氾濫や洪水で砂礫を中心とする土砂が一気に堆積したものと考えられる。VI層は単層で、黒色土や暗灰色土を主体とし褐色シルトや浅黄～にぶい橙色シルトを含んだ弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の遺物包含層で、層厚0.15～0.4mをはかる。このVI層上面で第1面として遺構の検出・精査を行っている。VII層はVII-1・2層まで細分でき、黒色～暗褐色土・粘土を主体とし、にぶい黄褐色砂壤土や灰黄褐色シルト質埴土を含んだ弥生時代後期遺物包含層で、層厚0.1～0.4mをはかる。VIII層はVIII-1・2層まで細分でき、黒色土～粘土を主体とし、灰黄褐色シルトを含んだ弥生時代中期遺物包含層で、層厚0～0.5mをはかる。IX層は単層で、黒褐色土を主体とし、にぶい黄橙色シルト質埴土を含んだ弥生時代前期～中期前葉の遺物包含層で、層厚0～0.1mをはかり、調査区南端にのみ観察される。X層は地山層でにぶい黄橙色シルト・灰白色シルト・明青灰色シルト・オリーブ灰色シルトといった自然層である。地形の起伏により検出される箇所によって土質が異なっている。第2面はこの地山面で遺構の検出・精査を行っている。地山検出面の標高は、およそ調査区北端がT.P.6m、南端がT.P.5mをはかる。北端から南端までの距離が25mで約1mの比高差をはかる。

#### 出土遺物

今回の調査において出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して約135箱に及び、その種類と内訳は蓋・壺・甕・鉢・高杯・器台・水差し・ミニチュアなどの弥生土器や土製品、石鍬や石槍石包丁・ナイフ形石器・削器・磨製石斧・砥石・敲石・石皿などの石製品、柱穴に残存していた柱材や板材、一木鋤や儀仗形の木製品、破鏡（金属製品）が出土している。古墳時代～古代の土師器や須恵器、中世の土師皿や黒色土器碗、陶磁器類がある。これら多量の遺物のうち、実測可能なものは数百点を数えるが、今回の概報においては弥生時代後期（V様式）～古墳時代前期初頭頃（庄内式併行期）の大溝と考えられるSD-01出土の遺物を中心に掲載した。

また、当該地の様相が、可能な限りイメージできるような完形品や時期がわかる遺構出土の遺物を掲載している。

#### 大溝（SD-01）

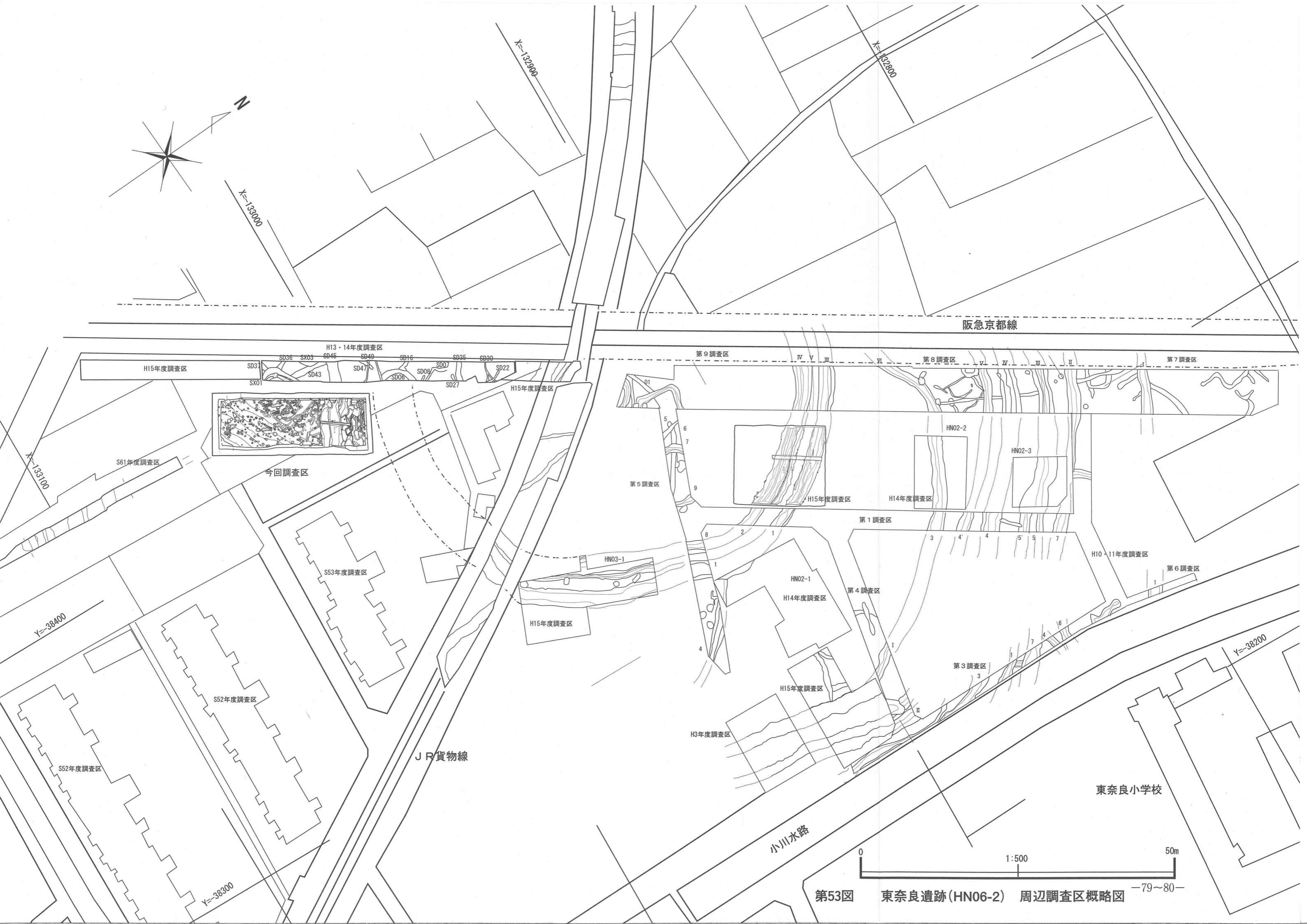
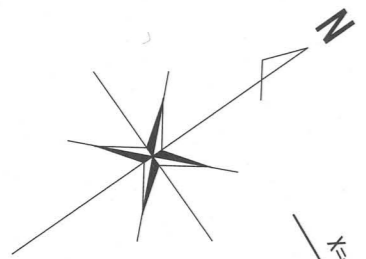
SD-01は調査区の北側を北西～南東方向に通っており、長さは約8.3m以上を測る。上端4.3～4.8m、中端1.7～2.0m、下端0.5～1.4m、深さは検出面から約1.3～1.45mで底面の標高はほとんど差がない。断面形はくずれた逆台形状・U字形を呈し、埋土は大きく分けてA～M層の13層に大別されるが、A～C層までは須恵器杯身等の出土遺物から古墳時代中期～後期頃の堆積と考えられる。D層の堆積を見ると、E層以下を掘り込んでいることから溝を改修していることが伺える。以下、各層の詳細を記す。

A層は黒褐色粘土、B層は浅黄橙色砂壤土、C層は灰黄褐色粘土が主体で、D層は黒褐色土～粘土、E層は黒色粘土、F層は灰黄褐色砂壤土でやや多く土器を含む。G・H層は黒色土主体で灰白色シルトブロックが混じり、多量の土器を含む。I層は黒色粘土、J層は黒褐色土が主体でにぶい黄橙色砂壤土（粗砂）が多量に混じる。K層は黒色土が主体で層状の褐灰色粘土が混じり、土器を少量含む。L層は黒色粘土が主体で層状の明青灰色シルトや浅黄色砂壤土が混じり、土器を少量含む。M層は褐灰色シルト質埴土である。

SD-01から出土した遺物は、後に詳述するが今回調査した遺物総量の約4割にあたる。そのほとんどが土器であるが、器種別に見ると蓋38点中13点・壺1,006点中371点・甕1,406点中861点・鉢136点中93点・高杯609点中224点・器台15点中10点・水差し16点中2点・手焙形土器2点中1点・（体部15,210点中6,209点・底部1,436点中646点）となっている。

【※器種の点数は主に口縁部・脚部等から換算した。なお、時期別にはなっていない。】



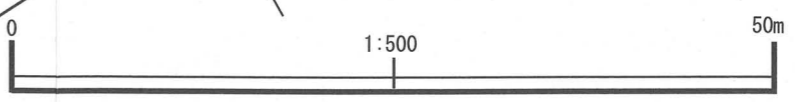


阪急京都線

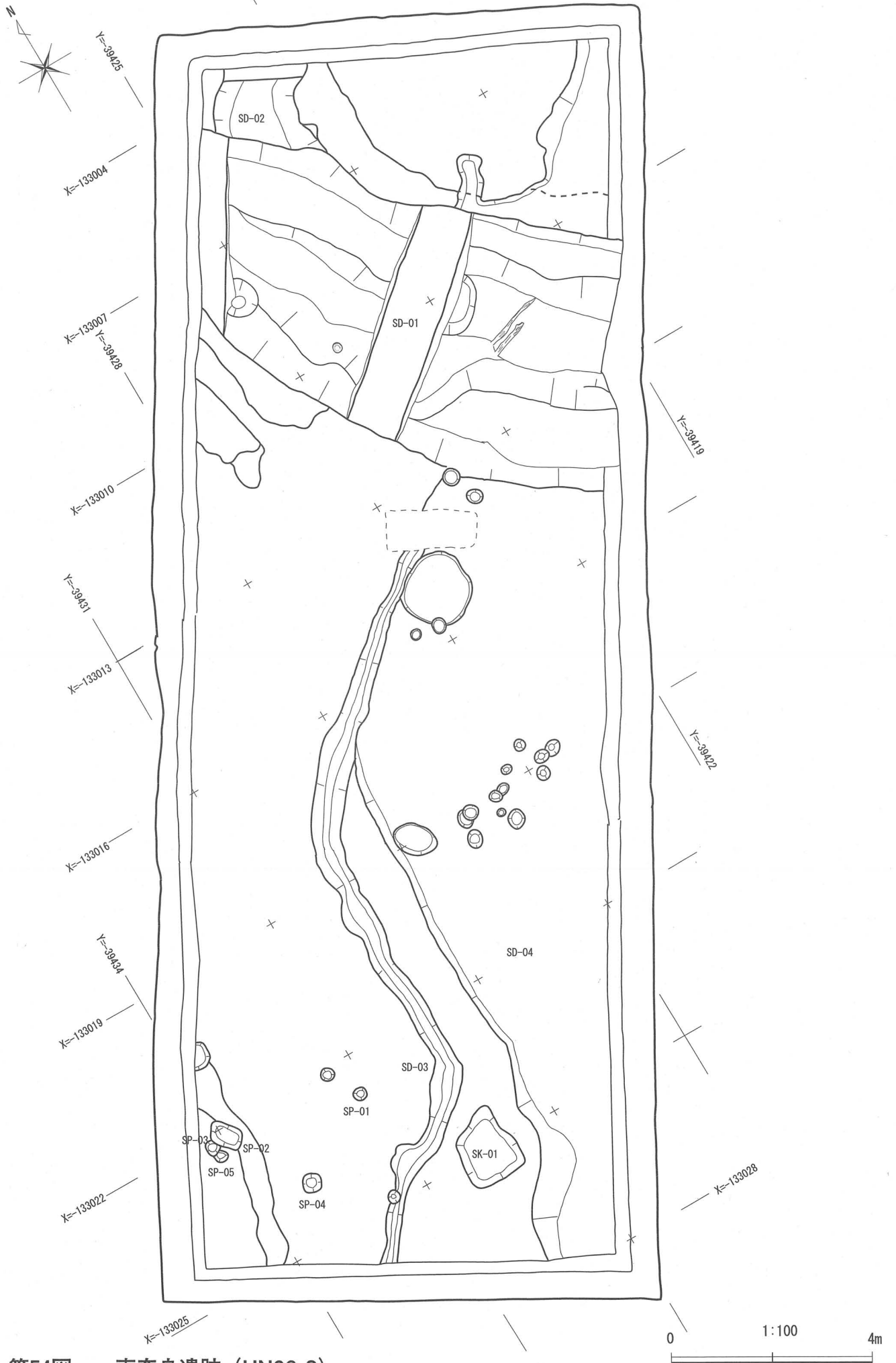
JR貨物線

小川水路

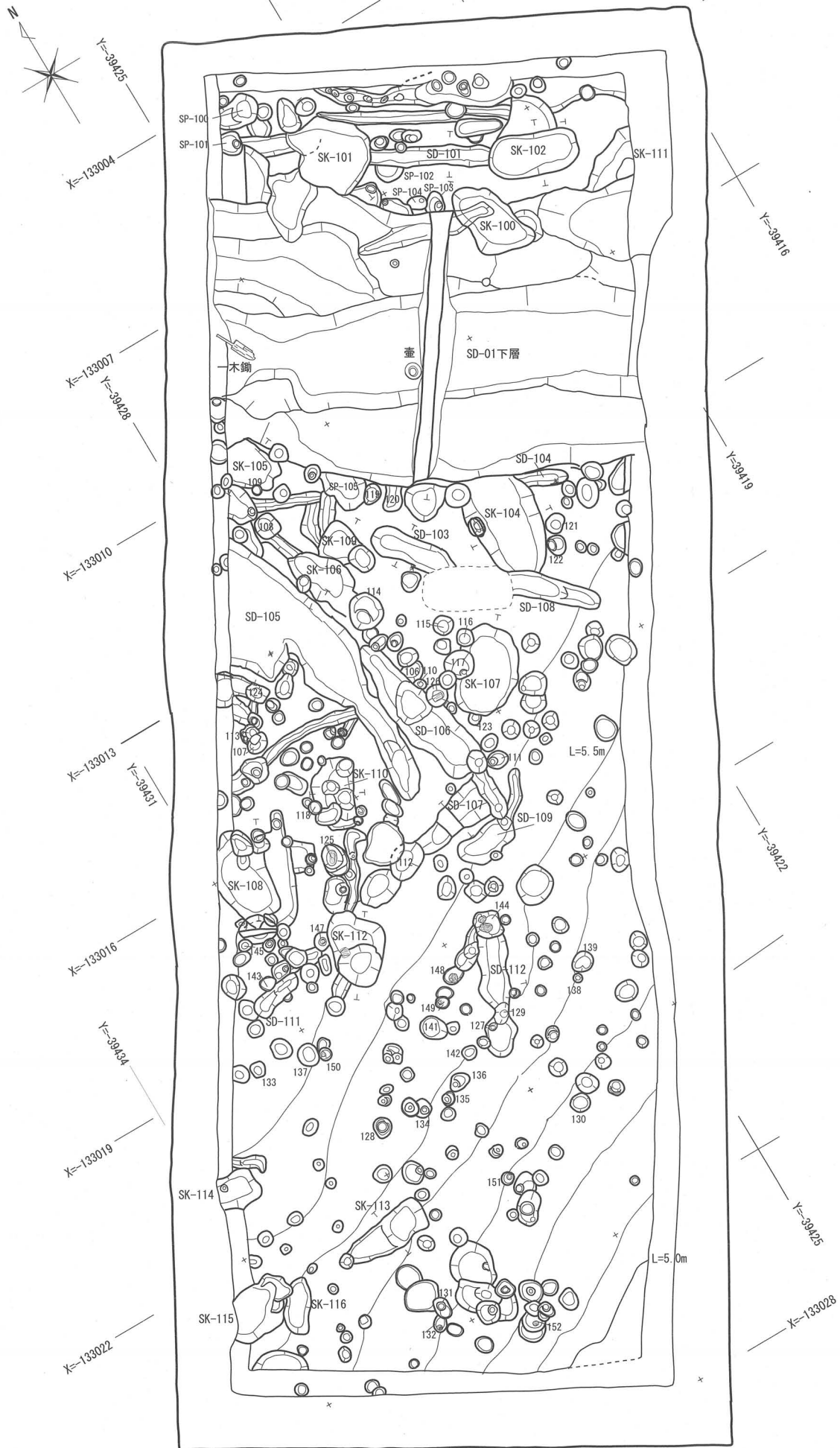
東奈良小学校



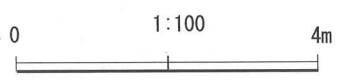
第53図 東奈良遺跡(HN06-2) 周辺調査区概略図 -79~80-



第54図 東奈良遺跡 (HN06-2)  
第1面調査区平面図



第55図 東奈良遺跡 (HN06-2)  
第2面調査区平面図





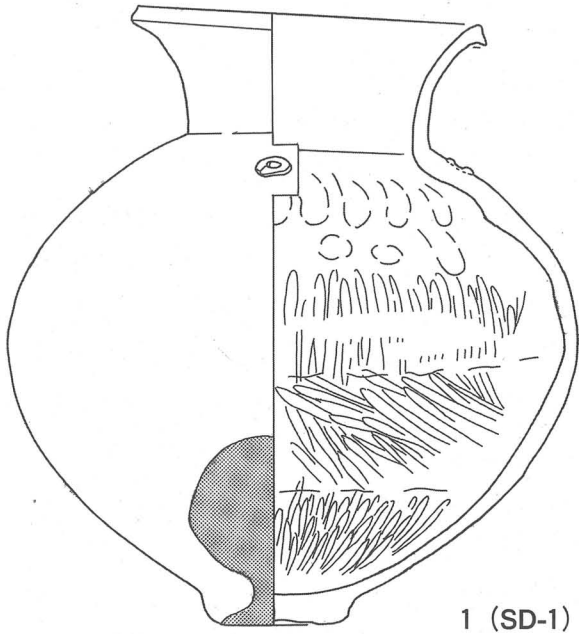
また、石器は石材17点・石核3点・石鏃3点・ナイフ3点・スクレイパー16点・フレイク7点・石包丁10点・石斧12点・砥石32点・石製品16点・他14点出土している。

**大溝 (SD-01) 出土遺物** 1・2はいずれも体部中央に最大径をもつ広口壺である。2は口唇部をつまみ上げ、体部下半が焼成後穿孔される。3・4は長頸壺である。3は口縁部と体部に明確なくびれがないタイプである。5小型台付広口壺で、口縁部と台部が欠損している。体部はやや下膨れしており、最大径は体部下半にあり9.4cmをはかる。体部外面は丁寧な刺突文を施した上、頸部と最大径部に櫛描平行文を施し、体部下半には縦ヘラミガキを施す。6は短頸壺である。7～9はタタキを施した弥生形甕である。7は体部中央が焼成後穿孔される。10・11は皿形坏部をもつ有稜高坏で、口縁部が外傾し強く外反する。内外面ともにヘラミガキ調整を施す。11は赤彩される。12は手焙形土器である。高さの低い受口の鉢に、やや垂直気味の蔽部が取り付けられている。内面はナデ、外面は蔽部が、刻目を施した突帯と刻目のない突帯で区画し、ヘラ描きによる稜杉文様をあしらう。鉢部は中央部を刺突文様の貼付突帯で区画し、上半をヘラ描きによる斜格子文を施し、下半はヨコヘラミガキを施している。摂津地域では高槻市郡家川西遺跡出土のものが最古とされている。13・14は皿部と脚部を貫く貫通孔のないタイプの小型器台である。対して、16は大型器台である。17～23はいずれも椀形の体部にやや突出した平底を持つタイプの小形鉢である。17・18・23は底面に貫通孔のある有孔鉢である。24～26はミニチュアの鉢である。27はミニチュアの高坏もしくは器台である。28～30は土錘である。31は槍形石製品で、32は柱状片刃石斧である。33・34は磨製石剣である。35は扁平形石斧である。36は破鏡（方格規矩鏡）で、推定直径は11.9cm、厚さは0.2～0.4cm、併せて重量23gをはかる。2つの破片になっているが、ちょうど外区と内区境の段で、厚さが薄くなった強度の弱い部分（櫛歯文帯）から破損している。外区は平縁で鋸歯文が見られ、内区は方画部と思われる。この破鏡の側面・端面をカット・研磨し、直径0.3～0.35cmの円孔を穿ってペンダントに再利用したものである。この破鏡は残存する破片から内区は方格・乳・T字の規矩がみられ、方格の一辺は推定3cmで中心にT字を配し、T字の両側に1個ずつ乳が付き、計8個の乳があるものと推定される。漢鏡5期（舶載鏡）で1世紀後半頃のものと思われる。

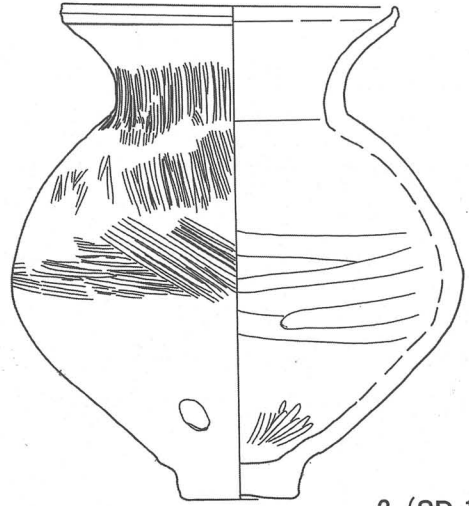
**その他の遺物** 37はSK-105出土の弥生時代中期の広口壺で、口縁部から頸部にかけて多段の櫛描平行文が施される。38は口縁部が直口気味で端部が広がり、やや体部が下膨れの広口壺である。39は口縁部内面に扇状文が施され、外面の口縁部～体部中央にかけて平行文や波状文等の複合櫛描文が施された中期の広口壺である。また、体部下半には焼成後穿孔された孔が1カ所見られる。40は水平口縁で、やや体部が摩滅した高坏である。41は甕で、口縁部が「く」字状に外反する。43は土師器小型丸底壺である。胴部中央に径1.0cmの孔がみられる。44・45はSD-01上層遺構で出土した須恵器坏身である。概ね古墳時代後期頃のものと思われる。46は柱状片刃石斧、47は土錘、48は不明土製品である。49は調査区南西端で出土した儀仗形木製品である。全長92.8cm・幅2.3～9.3cmをはかる。いたる箇所加工痕が認められる。

**遺物のまとめ** 今回は土器量940.9kg、石器が66.0kg、木器が59.8kgで、土器は  $\text{m}^3$  当たり3.76  $\text{kg}/\text{m}^3$  であった。また、SD-1の土器量は408.2kgで総土器量の約43%に相当する。なお、今回の調査で出土した石器の内訳は、チップ・フレイク（剥片）18点、コア（石核）14点、スクレイパー（搔器・削器）25点、ナイフ6点、石鏃4点、石錐2点、石ベラ3点、石槍4点、磨製石斧29点、石包丁25点、砥石74点、磨石8点、敲石2点、石製品8点、その他1点となっており計223点を数え、砥石の多さが目立つ。次に磨製石斧や石包丁が多く出土している。掲載遺物の詳細は遺物観察表に記した。

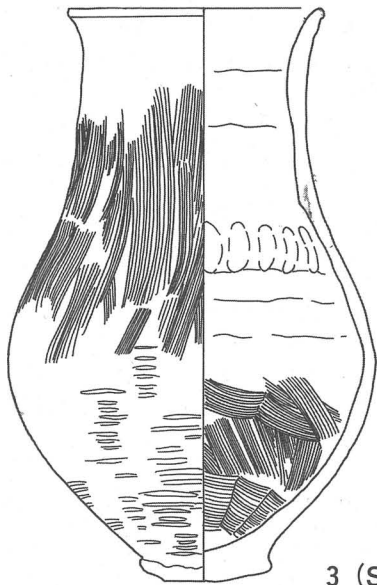




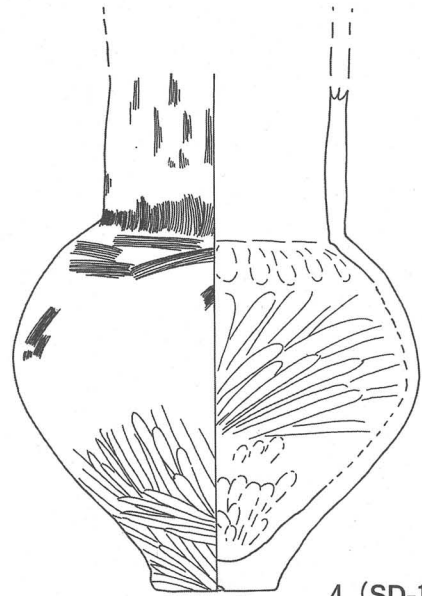
1 (SD-1)



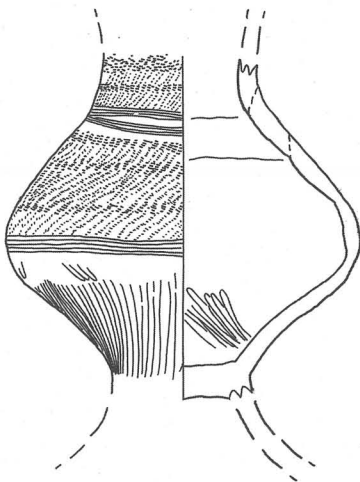
2 (SD-1)



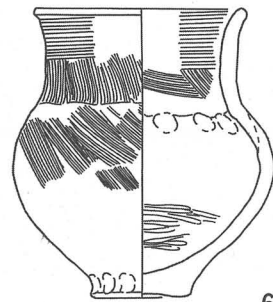
3 (SD-1)



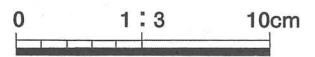
4 (SD-1)



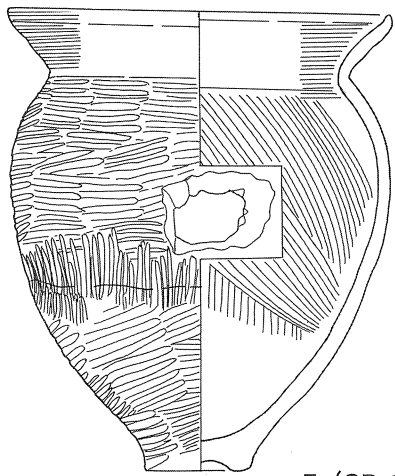
5 (SD-1)



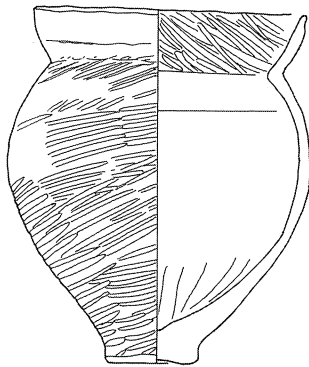
6 (SD-1)



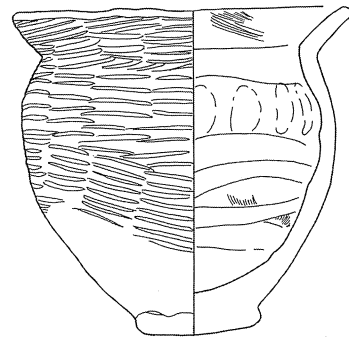
第57図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(1)



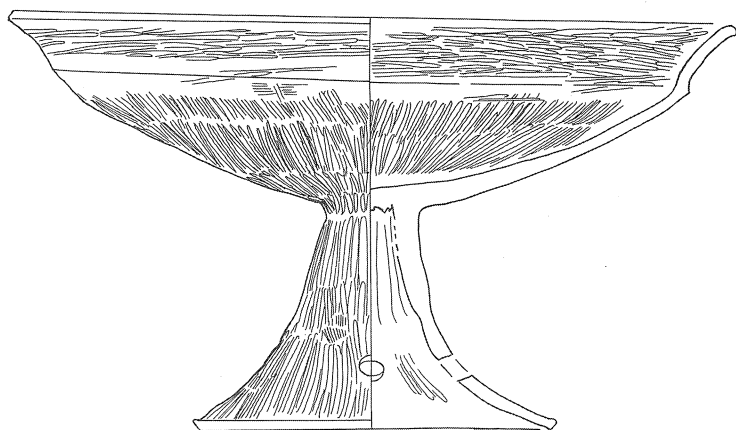
7 (SD-1)



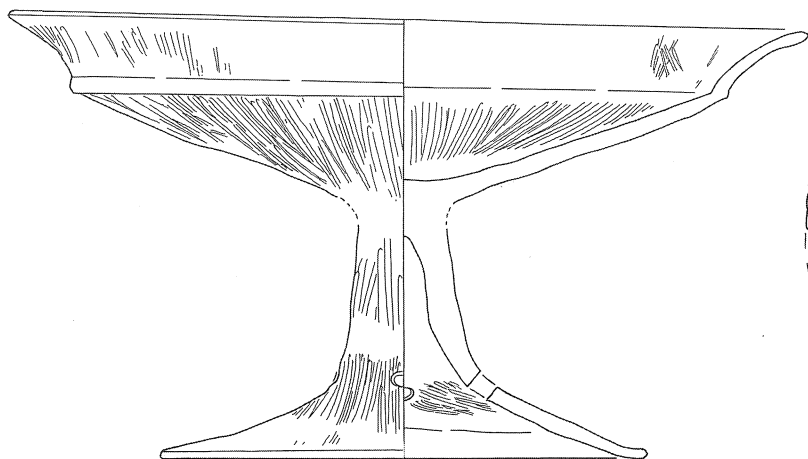
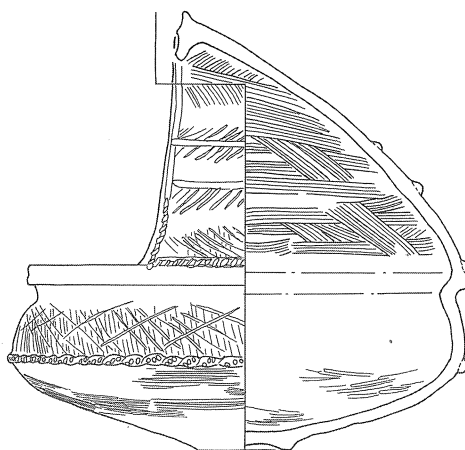
8 (SD-1)



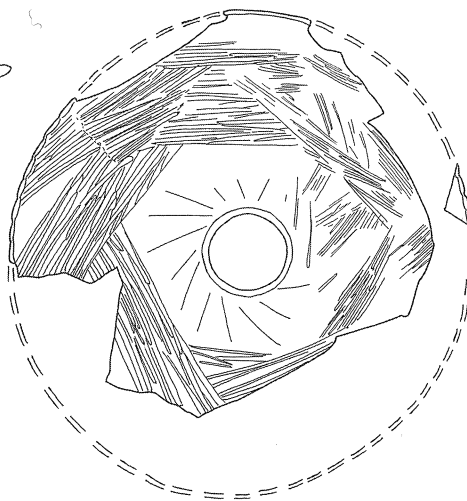
9 (SD-1)



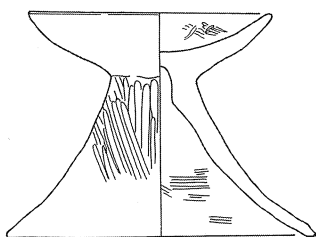
10 (SD-1)



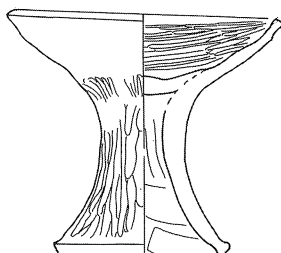
11 (SD-1)



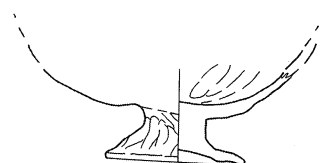
12 (SD-1)



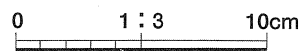
13 (SD-1)



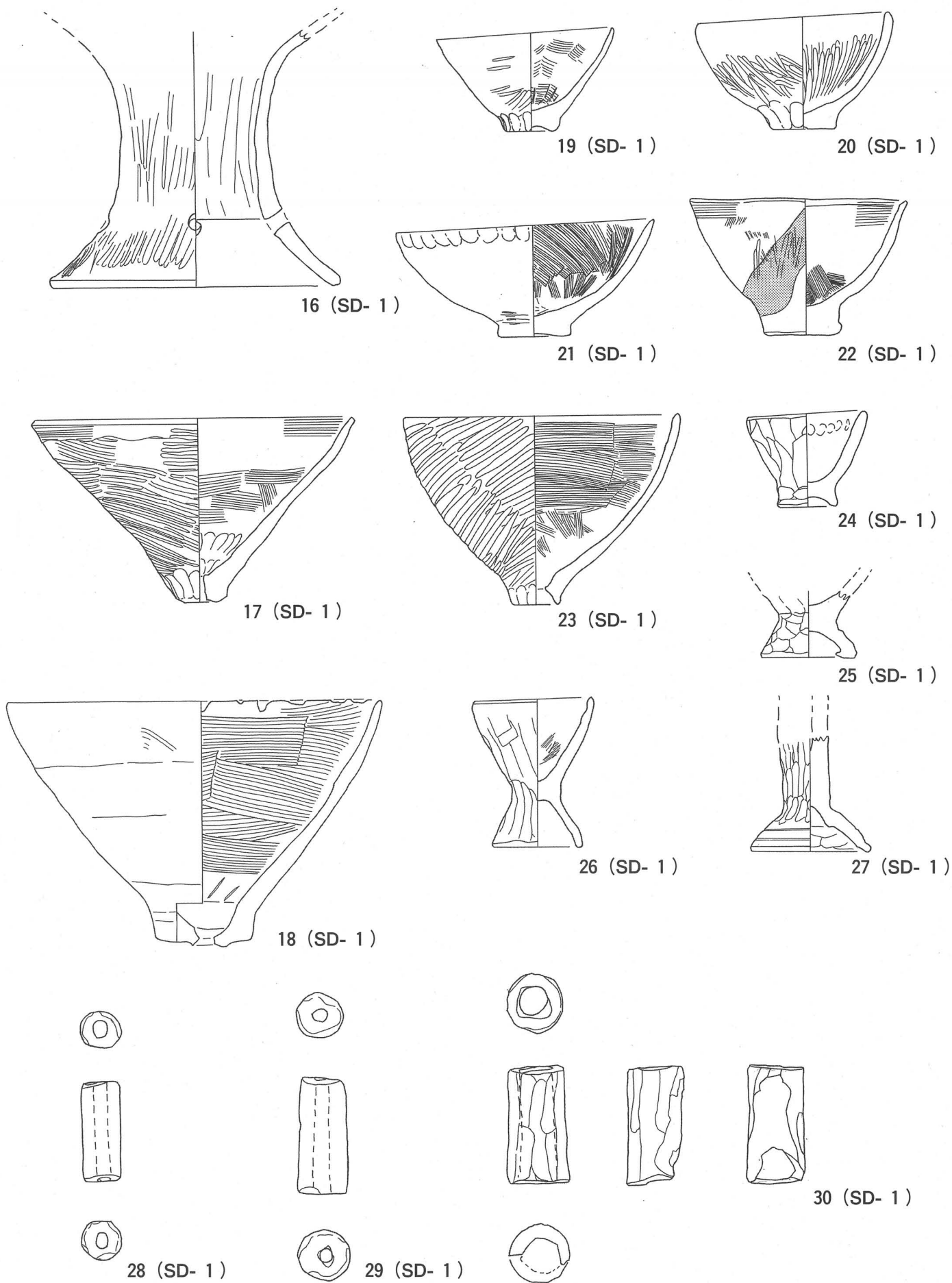
14 (SD-1)



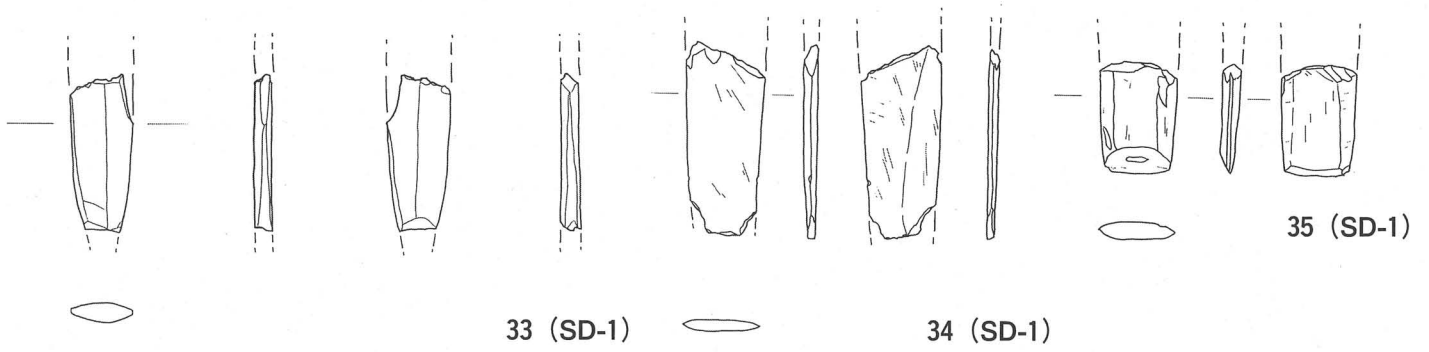
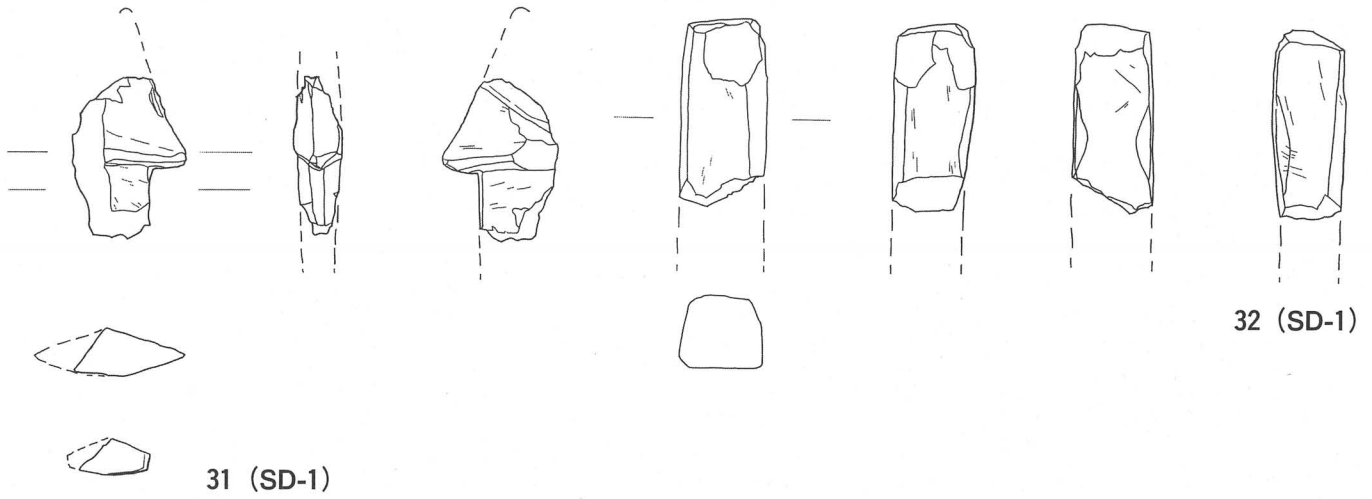
15 (SD-1)



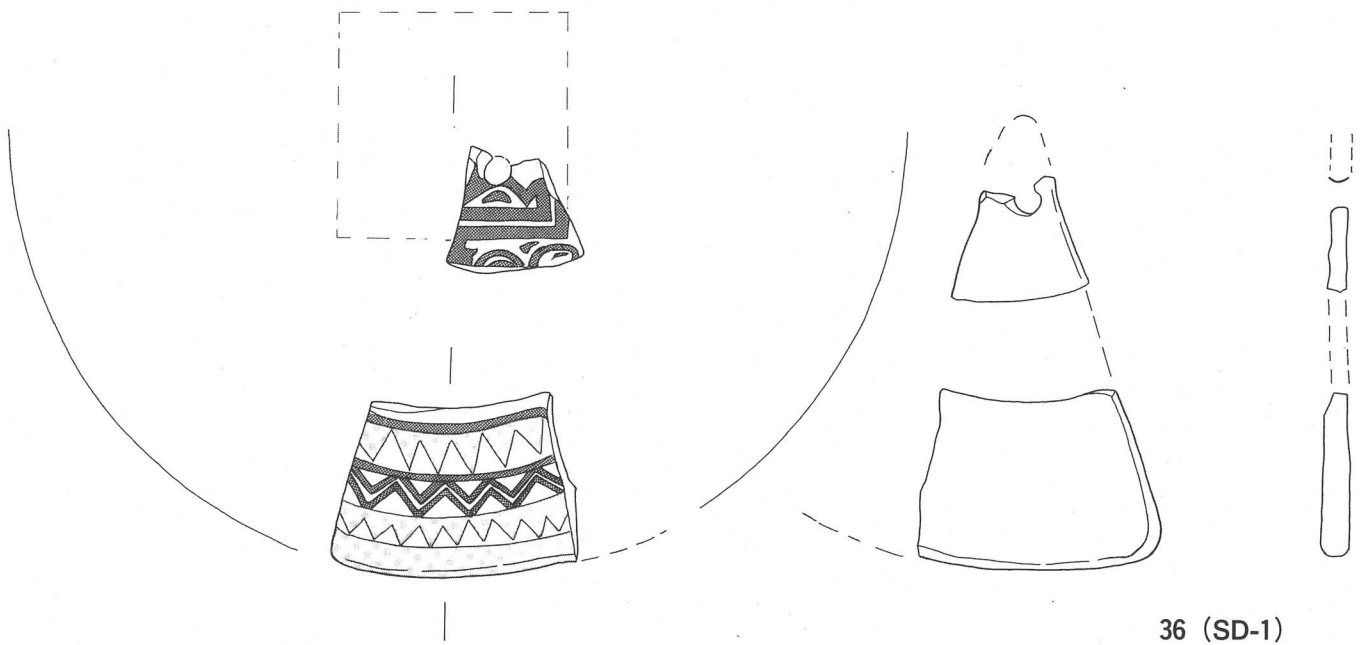
第58図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(2)



第59図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(3)

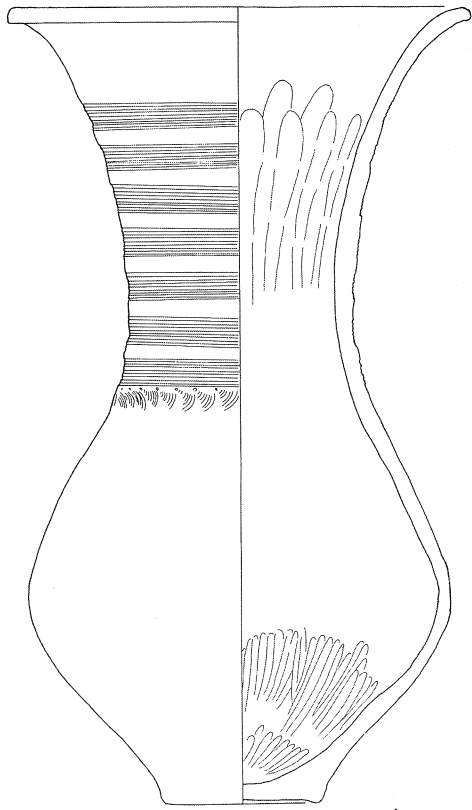


0 1:3 10cm

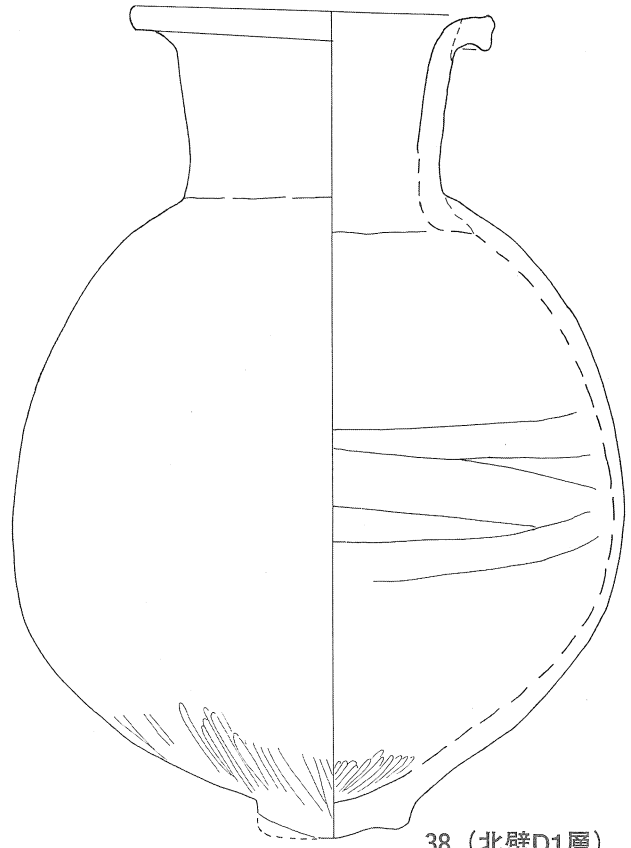


0 1:1 4cm

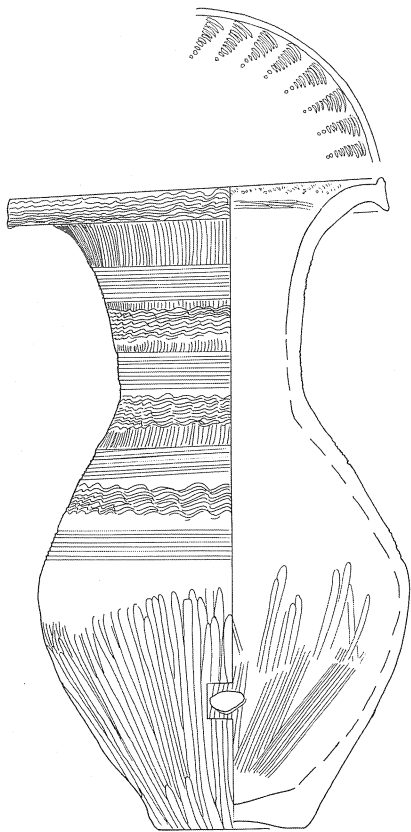
第60図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(4)



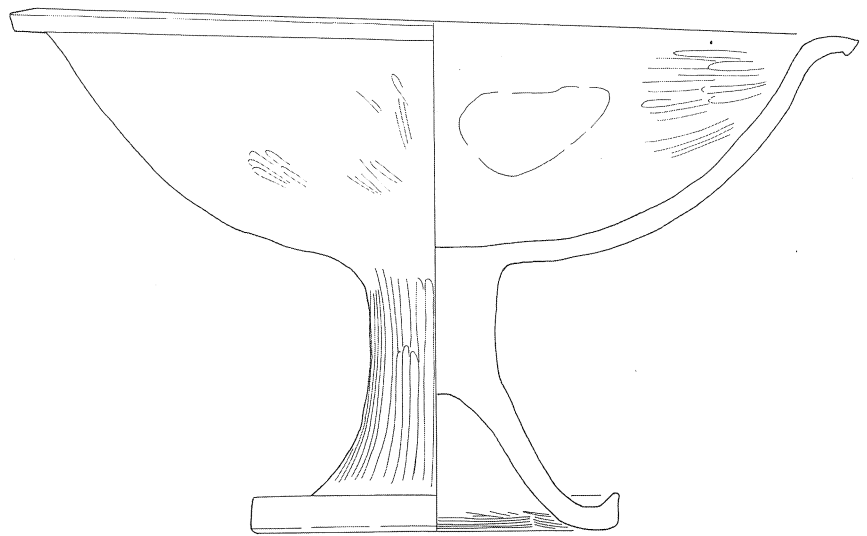
37 (SK-105)



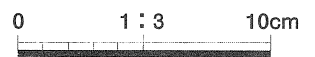
38 (北壁D1層)



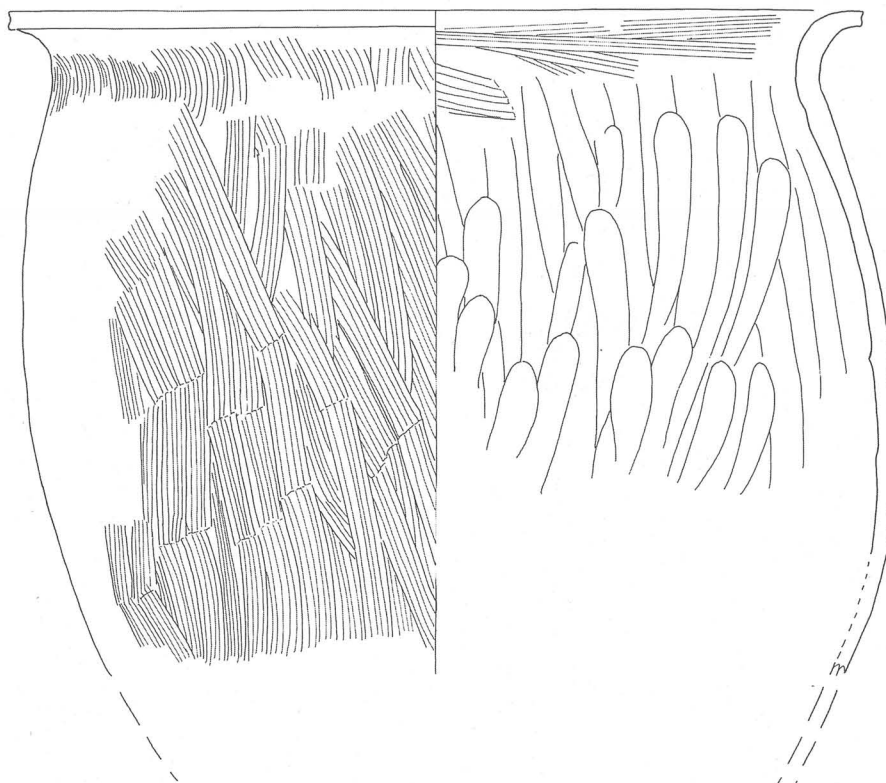
39 (南壁A1層)



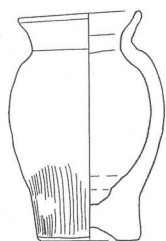
40 (包含層)



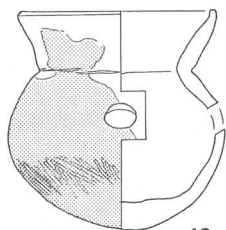
第61図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(5)



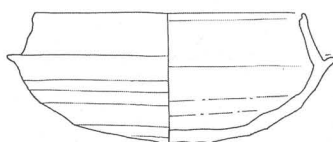
41 (包含層⑤層)



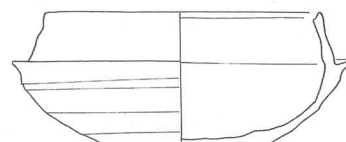
42 (包含層)



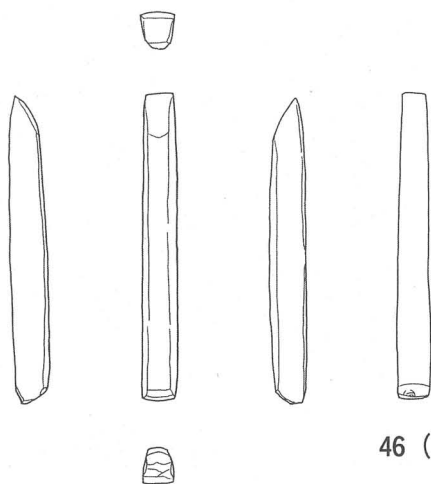
43 (包含層)



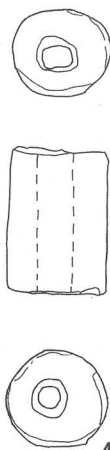
44 (SD-1上層)



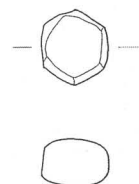
45 (SD-1上層)



46 (包含層⑤層)



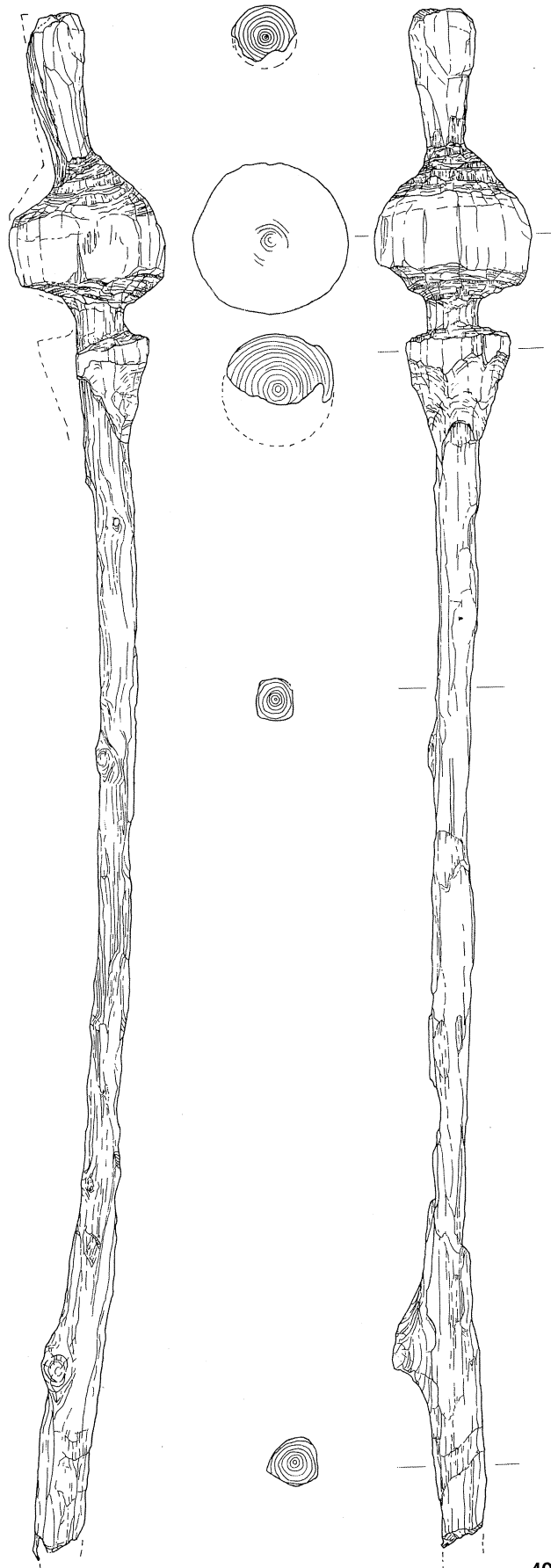
47 (包含層⑤層)



48 (包含層⑤層)



第62図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(6)



49 (包含層)

0 1:4 20cm

第63図 東奈良遺跡(HN06-2) 出土遺物(7)

周辺調査区では03-3(H16年度概報P.1~22)が土器量5,153.3kg、石器307.5kg、木器16.2kg、骨23.2kgを計る。土器量は $\text{m}^2$ 当たり10.39kg/ $\text{m}^2$ であった。02-1が土器量1,893kg、石器80.4kg、木器20.2kg、骨4.6kg土器は $\text{m}^2$ 当たり2.97kg/ $\text{m}^2$ を計り、02-2では土器量1,398kg、石器13.6kg、土器量は $\text{m}^2$ 当たり4.99kg/ $\text{m}^2$ であった。

#### まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃のSD-01を境に北側では遺構群が密に展開するのに対し、南側では遺構密度が希薄になってきている。また、調査区南端では地山面が標高(T.P.)5.0mと最も低くなっており、地山平坦面と比べると約0.7mの比高差を測り斜面となる。このことから、調査区の南側には自然の谷筋が通るものと推察される。弥生時代中期中葉頃になると、この谷筋は自然もしくは人為的に埋没し、弥生時代後期頃には、ある程度平坦な地形になっていくものと推察される。さらに、今回の調査区には弥生時代前期及び中期の環濠は1条も検出されておらず、周辺調査区概略図にも示した通り、調査区の北側を前期の環濠が通るものと推測される。また、南側に隣接するS61年度に調査された場所では、中期の環濠が複数確認されている。阪急京都線とJR貨物線が交差する東側を中心とする前期の環濠は、環濠内の直径が約60mほどであり、推定面積は約2,800 $\text{m}^2$ となる。しかし、弥生時代中期になると、前期環濠の外側約20~60mに拡大展開する弥生時代中期の環濠は6条確認されており、直径は170~180mほどになり、推定面積は約25,000 $\text{m}^2$ となり、面積は約9倍にも膨れ上がる計算になる。

出土遺物をみると、谷状地形の弥生時代中期遺物包含層内から儀仗形木製品が出土したことは、今回の調査区および周辺域が農耕儀礼と何らかの関連性があることを伺わせる。

また、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃の大溝SD-01からは多量の庄内式併行期の土器群と共伴して破鏡(方格規矩鏡)が出土した。この破鏡は、後に研磨・穿孔して、ペンダントに再加工されており、その出土状況が古墳に副葬されていたものではなく、集落内(大溝)出土で割れた鏡であることから、使用目的の差異が伺え、弥生時代後期から古墳時代への移行期における社会的背景を考える事象として有効である。周辺の事例では、弥生時代後期に属する高槻市芥川遺跡の住居内から方格規矩鏡の破鏡が出土している。

今回の調査では上記のような貴重な成果がみられたが、弥生時代から古墳時代という社会をとおして、歴史上この東奈良という地域がどのような地域であったか他遺跡と共通する特徴などを比較検討しながら、これまでの成果を詳細にわたって分析・研究する必要がある。また、東奈良遺跡の特徴として、弥生時代前期～古墳時代前期にかけて長い期間集落が存続し、かつ銅鐸鋳型をはじめとする金属器を加工・生産する特殊技術を有し、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃の破鏡(方格規矩鏡)を伴うことなどから、ある程度、周辺に展開する同時代の集落遺跡と比較して求心力を維持し続けていた地域であることがあらためて確認されたといえよう。今後の調査・研究に期待したい。

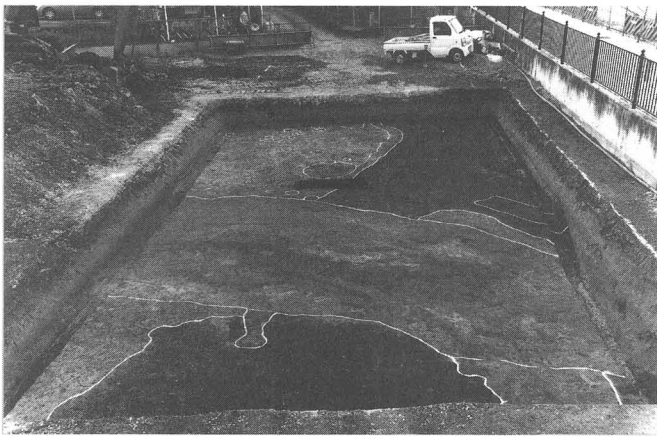
※ なお、破鏡については、福永伸也氏(大阪大学大学院)ならびに山本彰氏・秋山浩三氏((財)大阪府文化財センター京阪調査事務所)に鑑定・御教授頂いた。誌面ではありますが、ここに謝意を記します。



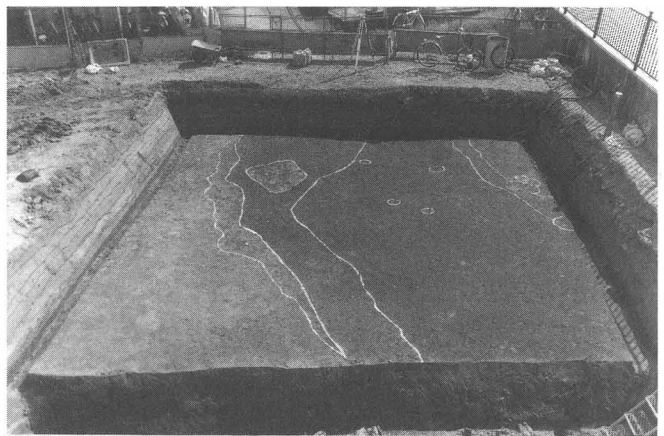
# 東奈良遺跡(HN06-2) 遺物観察表

掲載番号	遺構			種類	器種	法量			色調	調整		胎土	焼成	残存率	時期	備考
	層	位置	形状			高さ	口径	底径		外面	内面					
1	北半部	SD-01	下層	弥生土器	壺	24.1	13.5	4.3~4.7	灰白色	摩滅	ナデツケ・ハラカキ・ナデ	1~5mm白色砂粒含	○	95	VI-1~(2)様式	体部最大径22.3cm
2	北半部	SD-01	下層	弥生土器	広口壺	14.6	13.0	4.1	灰白~淡黄緑色	ハラメ	口ヨコナデ、体中ナデ、体下ハラカキ	0.2~2mm褐色砂粒多	○	92	VI-1~(2)様式	孔あり(体下)、体部最大径15.7cm
3	北半部	SD-01	D1層	弥生土器	長頸壺	23.0	9.45~9.8	(4.8)	淡黄色・淡黄緑色	口ヨコナデ、体上ハラカキ・ハラメ、体下ハラメ	口ヨコナデ、体上ナデツケ、体下ハラメ	○	96	V様式末	体部最大径14.5cm	
4	北半部	SD-01	下層	弥生土器	長頸壺	20.4~	—	4.75~5.15	灰白色	口ハラメ、体ハラメ・ハラカキ	口ハラメ、体ハラカキ	0.3~1mm白・黒色砂粒多	○	90	V-2~VI様式	体部最大径15.9cm
5	北半部	SD-01	下層	弥生土器	小型台付広口壺	9.0~	—	—	灰白~淡黄緑色	刺突文~くし描・ハラカキ	ハラカキ	◎	55	VI様式?	体部最大径9.4cm	
6	北半部	SD-01	下層	弥生土器	短頸壺	11.4	8.0	3.9	灰白色・淡黄緑色	口ハラメ・ヨコナデ、体ハラメ	口ハラメ・ヨコナデ、体ハラメ	0.2~1mm白・黒色砂粒含	○	98	VI様式?	体部最大径10.25cm
7	北半部	SD-01	下層	弥生土器	鈎形蓋	13.0	14.9(最大径)	4.25	灰黄色	鈎形ハラカキ	巾広のハラメ	0.2~4mm白色粗粒、ケル稜	○	92	VI-1-2様式	頸部径11.8cm
8	北半部	SD-01	下層	弥生土器	蓋	13.9	10.6	3.4	灰白色	鈎形ヨコナデ	口ハラカキ、体ナデ	0.5~1mm黒色砂粒含	○	70	VI-2様式	
9	北半部	SD-01	下層	弥生土器	鈎形蓋	12.9	13.0(最大径)	4.4	にぶい橙・淡橙~緑色	鈎形	口ハラメ・ヨコナデ、体ハラメ・ナデ	0.2~0.5mm白・黒色ケル稜含	○	97	VI-2様式	多量のス付着、くの字口縁鈎形出し手法
10	北半部	SD-01	下層	弥生土器	高坏	16.6	28.0	13.9	灰黄色	ハラメ・ハラカキ	ハラカキ	○	75	VI-0様式	脚に4ヶ所の孔あり(φ1.1cm)	
11	北半部	SD-01	下層	弥生土器	高坏	16.9~17.7	30.8	19.0	明赤灰~赤色	ハラカキ(赤影)一端部ヨコナデ	ハラカキ(赤影)一端部ヨコナデ	○	85	VI-1様式	脚に4ヶ所の孔あり(φ0.9cm)	
12	北半部	SD-01	下層	弥生土器	手燈形土器	17.3	—	3.6	灰白色	ハラメ・貼突ナデ・ハラメ・ハラカキ	体上ハラメ、体下ハラメ・ハラカキ	0.3mm黒色砂粒	○	85	VI-2様式	体部最大径17.95cm
13	北半部	SD-01	下層	弥生土器	小型器台	8.8	9.3	12.0	明赤灰~にぶい赤褐色	体ナデ、脚ハラカキ	体ハラカキ、脚ハラメ	○	60~65	VI-2様式	頸部径3.1cm、B形盤	
14	北半部	SD-01	下層	弥生土器	小型器台	9.55~10.0	10.3	6.4	灰白色	口ヨコナデ、脚ハラカキ	口ハラカキ・ヨコナデ、脚ハラカキ	◎	100	VI-1~(2)様式	色調底部に薄い黒斑あり	
15	北半部	SD-01	中層	弥生土器	鉢	3.8~	—	5.0~5.4	淡黄緑色	ナデ	ナデ	0.3~1mm白色砂粒	○	60	VI-1~(2)様式	
16	北半部	SD-01	下層	弥生土器	器台	15.2~	—	16.4	淡黄緑色	ハラカキ・ヨコナデ	ユビナデ	△	85	VI-1~2様式	最小径8.4cm、脚に4ヶ所の孔(φ0.8~0.9cm)	
17	北半部	SD-01	下層	弥生土器	有孔鉢	10.6	18.3	3.2(孔φ0.5~0.8)	灰白色・淡黄緑色	鈎形	ハラメ・ナデツケ	0.2~0.5mm白色砂粒含	○	85	VI-1様式	
18	北半部	SD-01	下層	弥生土器	有孔鉢	14.2	21.4	5.5(孔φ0.7~1.1)	にぶい黄緑色	ハラメ	ハラメ	0.5~2mm白・黒色砂粒多	○	75	VI-1~2様式	口縁打ち欠き
19	北半部	SD-01	下層	弥生土器	鉢	5.3~5.95	10.1	2.8	淡黄緑色	ハラカキ、下端ナデ	ハラメ	0.5~3mmの黒・白色砂粒・ケル稜含	○	90	VI-0-1様式	
20	北半部	SD-01	下層	弥生土器	小型鉢	6.15~6.65	11.4	3.9	灰白色・淡黄緑色	口ヨコナデ、体ハラカキ	口ヨコナデ、体ハラカキ	◎	100	VI-2~3様式		
21	北半部	SD-01	下層	弥生土器	鉢	6.1~6.7	14.7	3.8	灰白~淡黄緑色	口ユビナデ、体下ハラカキ・ハラメ	ハラメ(放射状)	0.2~0.5mm砂粒・2~4mm小石多	○	97	V-3~VI-1様式	
22	北半部	SD-01	下層	弥生土器	鉢	7.6	12.3	4.1	灰白色・にぶい黄緑色	ハラメ・ハラカキ、口ヨコナデ	口ヨコナデ、体ハラメ	○	100	VI-1様式		
23	北半部	SD-01	G1層	弥生土器	有孔鉢	10.9	15.0~15.7	2.7(孔φ1.0~1.2)	灰白色・淡黄緑色	鈎形(4.3cm巾x6.0cm長)	ハラメ(2cm巾)	0.1~2mm白・黒色砂粒含	○	99	VI-1様式	
24	北半部	SD-01	下層	弥生土器	ミニチュア鉢(蓋?)	5.4	6.6	3.3	灰白~淡黄緑色	ハラカキ・ユビナデ	ユビナデ	0.5~2mm黒・白色砂粒含	○	100	VI様式	
25	北半部	SD-01	下層	弥生土器	ミニチュア鉢	3.8~	—	5.15~5.6	淡黄緑色	ナデツケ	ナデ	0.2~0.5mm	○	55	VI様式?	
26	北半部	SD-01	下層	弥生土器	小形鉢	8.6	6.7	5.05	淡黄緑色	ハラカキ	ハラメ	0.3~0.5mm白・黒色砂粒	○	75	VI様式?	黒斑あり
27	北半部	SD-01	下層	弥生土器	ミニチュア高坏	6.7~	—	6.7	淡黄緑色	ハラカキ	ハラカキ	0.3~0.5mm白色砂粒含	○	50	VI様式?	
28	北半部	SK-105	埋土	弥生土器	広口壺	31.5	17.55	6.2	にぶい黄緑色	くし平	ナデ、体下ハラカキ	2~4mm白色小石含	○	90	IV-1様式	くし平平行文(10本1条7段)
29	北半部	SD-02	D1層	弥生土器	広口壺	17.8	14.0	5.6	淡黄緑色	体下ハラカキ	体中ハラカキ、体下ハラカキ	0.2~1mm白・黒色砂粒含	○	95	III-2~(IV)様式?	体部最大径24.5cm 頸部径10.0cm 頸部高7.0~7.6cm
30	南半部	両壁断面	A1層	弥生土器	広口壺	14.8~15.7	14.7	5.5	灰白~淡黄緑色	体上ハラメ・複合くし描文、体下ハラカキ	口唇状文・ハラカキ、体下ハラメ・ハラカキ	0.2~2mm白色砂粒含	○	100	IV-1様式	複合くし描文(平行文4条・波状文4条)
31	南半部	包含層	—	弥生土器	高坏	20.8	33.3	13.8	灰白色	ハラカキ	ハラカキ	0.5~2mm白・黒色砂粒含	○	95	II-2様式	水平口縁、調整底外ハラメ・頸部ハラカキ
32	南半部	包含層	V-5層	弥生土器	蓋	26.4~	33.4	—	灰白色	ハラメ	口ハラメ、体ナデ	0.2~0.5mm黒色粒	○	50	III-1~(2)様式	
33	北半部	包含層	下層	弥生土器	ミニチュア	8.9	4.6~5.0	3.9~4.1	灰白~褐色・灰黄緑色	口ヨコナデ、体下ハラメ・ユビナデ	ナデ	0.5~2mm黒・白色砂粒多	○	98	II様式?	
34	北半部	包含層	下層	土師器	小型丸底壺	8.7	7.6	丸底	灰白色・淡黄緑色	口ヨコナデ、体ハラカキ	口ヨコナデ、体ナデ	0.2~2.5mm粒含	○	100	VI-3	孔あり(1孔φ1cm)
35	北半部	SD-01	C層	土師器	坏身	5.1	10.6	—	青灰色	回転ハラカキ	口ヨコナデ	○	100	50末~60初(TK23-47)	最大径13.0cm	
36	北半部	SD-01	C層	土師器	坏身	5.55	10.8	—	灰白~灰色	回転ハラカキ	口ヨコナデ	◎	98	50末~60初(TK23-47)		

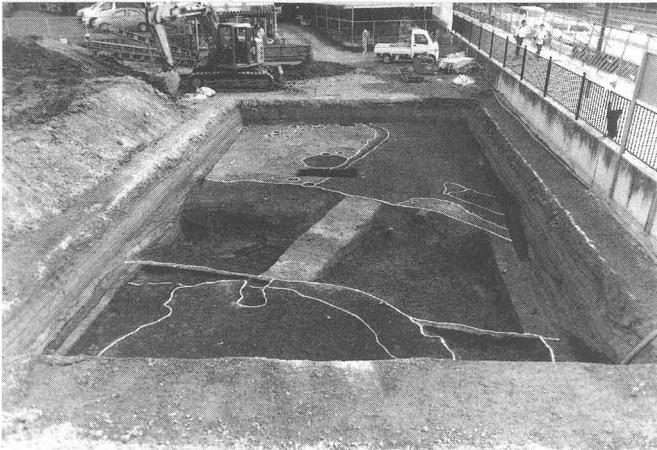
掲載番号	遺構			器種	材質	法量				色調	調整	残存	時期	備考
	層	位置	形状			最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)					
28	北半部	SD-01	下層	土師器	—	5.6	2.1x2.2	—	39	淡黄緑色		100		
29	北半部	SD-01	下層	土師器	—	6.8	2.6x3.0	—	29	にぶい黄緑色		100		孔径φ0.65~0.8、黒斑あり
30	北半部	SD-01	下層	土師器	—	6.8	3.2x3.4	—	73	灰黄褐色		85		
31	北半部	SD-01	下層	石製品	結晶片岩	6.5~	4.4~	1.9	41	灰白色~灰色		40?		楕形石製品
32	北半部	SD-01	下層	石斧	結晶片岩	7.5~	(3.3)	2.9	146	暗灰色		60?		柱状片刃石斧
33	北半部	SD-01	下層	磨製石剣	結晶片岩	6.2~	2.4~	0.8	18	灰色		65?		
34	北半部	SD-01	下層	磨製石剣	玉系?	7.7~	3.1~	0.4	16	灰白色~灰色		50?		
35	北半部	SD-01	下層	石製品	結晶片岩	4.3~	3.0~	0.7	16	暗灰色		65		扁平石斧
36	北半部	SD-01	下層	漢鏡	(方格規矩鏡・破鏡)	推定11.9~	18~3.3~	0.2~0.4	4+19=23	暗緑灰~緑灰色	内区一乳(推定)8個/T-V規矩	5~6	漢鏡5期:1世紀後半	ハンゾウ(2次使用)
46	南半部	包含層	(1)~(2)V-5層	石製品	玉系?	12.3	1.5	1.4	46	灰白~明緑灰色		100		柱状片刃石斧(軟質)
47	南半部	包含層	V-5下層	土師器	—	5.8	3.5x3.9	—	112	灰白~淡黄緑色		100		
48	南半部	包含層	V-5層	土師器	—	2.9~3.1	—	1.9	17	淡黄緑色		100		
49	南半部南西端	包含層	III-2層	木製品	?	92.8	1.7~9.3	—	—	—		90?		楕枝形木製品、A(長さ8.0x巾2.3~4.0x厚さ3.0)、B(長さ10.0x巾2.3~4.0x厚さ3.0)、C(長さ3.0x巾2.3~6.2x厚さ6.4)、D(長さ6.6x巾1.7~5.3x厚さ2.2)、E(厚さ3.1)



調査区北半部第1面検出状況（北東から）



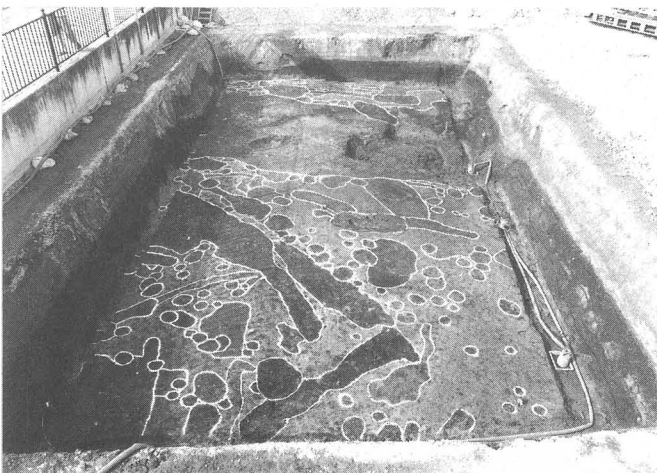
調査区南半部第1面検出状況（北東から）



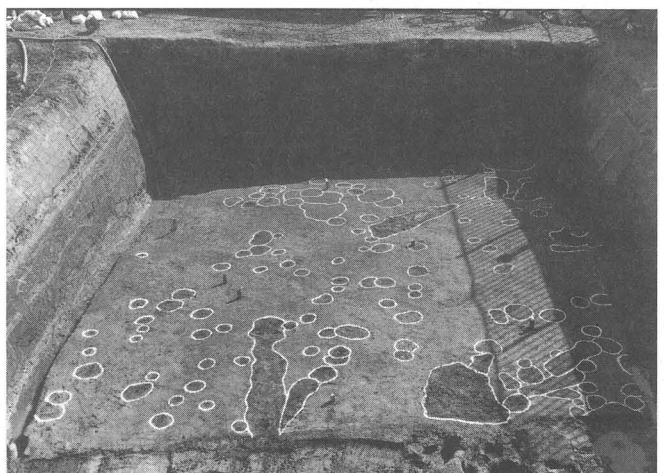
調査区北半部第1面全景（北東から）



調査区南半部第1面全景（北から）



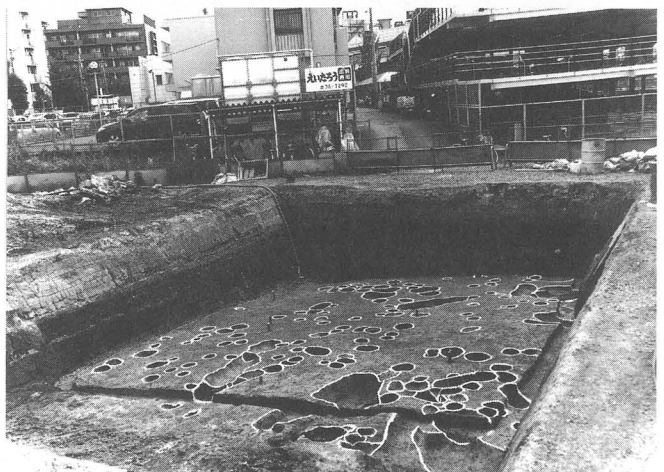
調査区北半部地山面検出状況（南西から）



調査区南半部地山面検出状況（北東から）

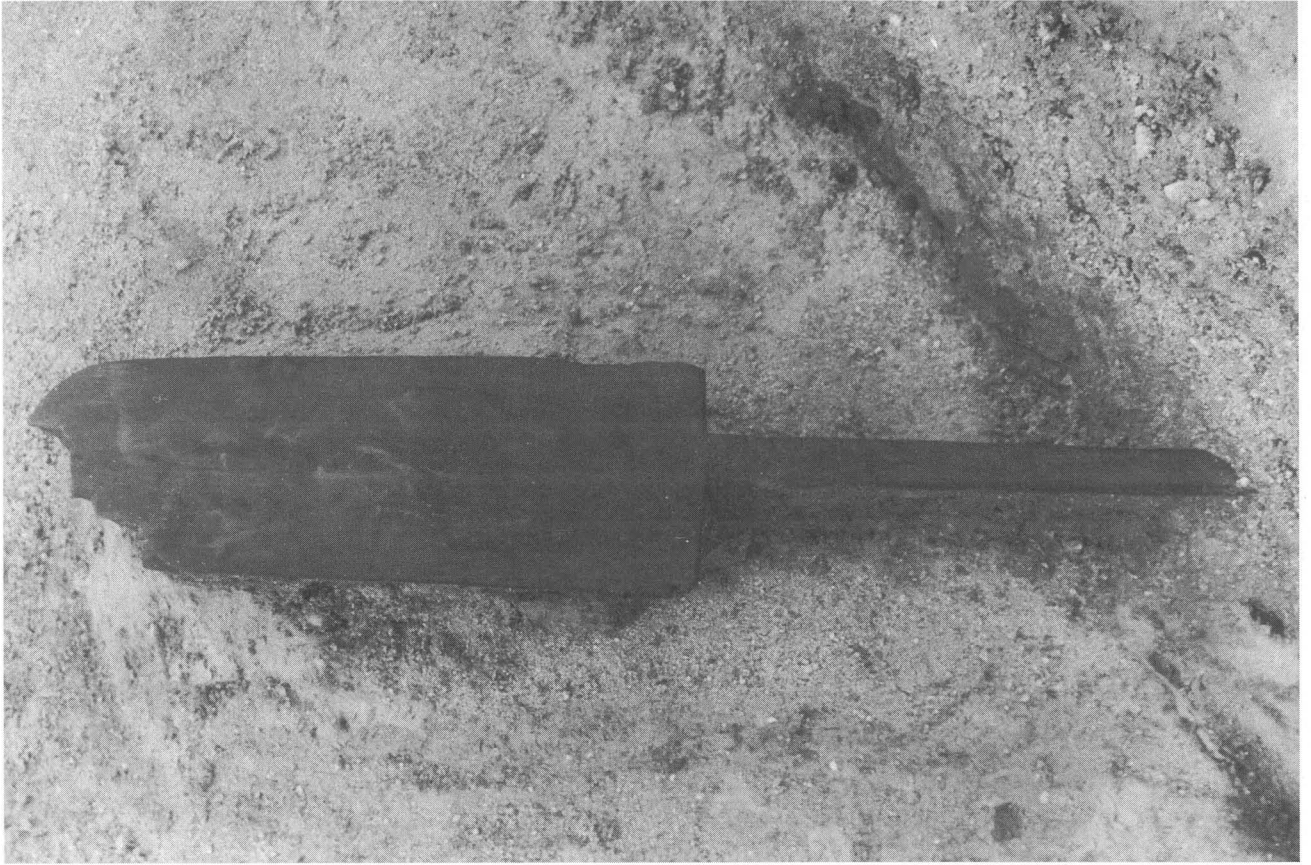


調査区北半部地山面全景（北東から）



調査区南半部地山面全景（北から）

第64図 東奈良遺跡(HN06-2) (1)



SD-01 底面出土 木製鋤(東から)



遺物包含層出土 儀杖形木製品

第65図 東奈良遺跡(HN06-2) (2)

# 茨木遺跡

**所在地** 茨木市大手町804-1・804-4  
**開発事業** 共同住宅建設事業  
**調査期間** 平成18年9月28日～平成18年10月20日  
**調査面積** 119㎡  
**調査担当** 宮本 賢治  
**調査結果**

茨木遺跡は、上泉町・元町・本町・片桐町・宮元町・大手町にかけて広がる、弥生時代から中・近世にかけて営まれた集落跡である。遺跡の範囲は、東西約300m、南北約700mと南北に長く広がっている。その中でも、本年度調査された本町地域においては、大溝より欄間や建具などが保存の良い状態で出土している。

また、南方には平成4年度から同7年度まで大阪府立茨木高等学校の建て替えに伴う発掘調査が大阪府教育委員会によって行われ、この時の調査によって新庄遺跡の存在が知られるようになった。この調査により、弥生時代前期から古墳、平安、中世、そして近世までの複合遺跡の様相が新たに判明している。特に弥生時代後期の竪穴式建物跡からは、北東辺に出入口を持ち、南東辺にベッド状施設を有する遺構が検出されている。

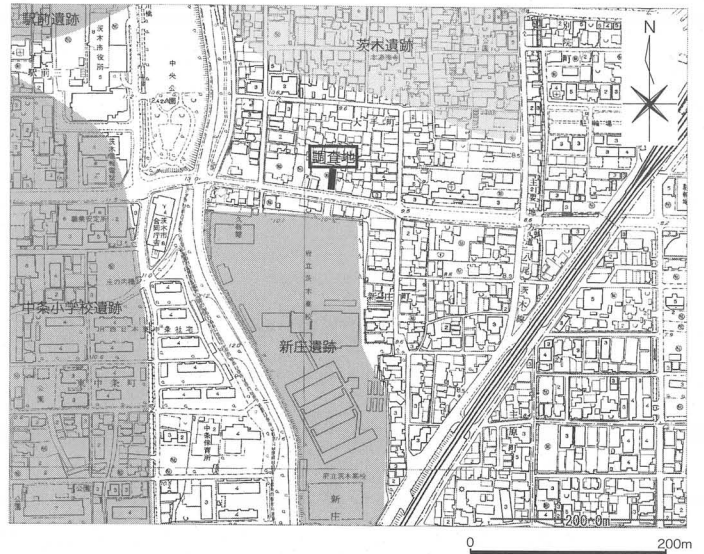
今回の調査地は、茨木遺跡の包蔵地の南限と新庄遺跡の北限の間に挟まれた、遺跡の包蔵地としての存在が知られていない空白地帯であった。しかし、今回共同住宅の建設に伴い、事前に現地においてトレンチを設定し試掘調査を行った結果、中世頃の生活の痕跡を示す遺物および遺構を検出した。その後、施主の方と数度の協議を経て、今回の本発掘調査を実施するに至った。

調査の方法としては、本発掘調査と本体周辺工事がほぼ同時進行に行われたため、機械掘削などで出土した土置き場の確保が困難な事からトラックで搬出して全面一括調査を実施するに至った。

今回の調査では室町時代後半頃の生活面を中心とした面を第1遺構面、室町時代中頃の生活面を中心とした第2遺構面、平安時代から鎌倉時代の頃の生活面を中心とした面を第3遺構面（最終面）とした。

## 基本層序

基本層序については、第1層～第11層に大別することができる。上層より順に、現代の盛土層（約1m、既存の駐車場の盛り土などの整地層を含む）、近・現代の攪乱層（約10cm）、混濁土層



位置図

(オリーブ褐色砂-S2.5Y 4/6 摩滅した土師器細片、マンガン多量に含む。客土に相当。約10cm)、第1遺構面直上包含層(浅黄色砂-S2.5Y 7/3 土師器片、マンガン多量に含む。約10~20cm)、第2遺構面直上包含層(黄灰色粘質土-CL2.5Y 6/1 土師器片、マンガン多量に含む。約20cm)、中世遺物包含層(灰色砂質土-SL7.5Y 5/1に黄褐色砂粒-S10YR 5/6 土師皿、瓦器片を含む。約14cm)、中世遺物包含層(黄灰色粘質土-CL2.5Y 6/1 土師器片含む。約20cm)、自然層(灰色-5Y 4/1 約6cm)、中世遺物包含層(黒褐色粘質土-10Y 3/1 約4~16cm)、古墳~中世遺物包含層(オリーブ黒色-5Y 3/2 約20cm)、地山層(黄褐色-10Y 5/6)に分ける事ができる。

### 検出遺構

第1遺構面では、中・近世を中心とした生活面を検出している。検出された遺構としては、中世の鋤溝11基とピット状遺構9基、溝遺構1基、井戸遺構を1基である。特に鋤溝については、耕作当時は条里制に基づいた東西方向を基調としたものがあったと考えられるが、攪乱により一端のみしか捉える事ができなかった。

第2遺構面では、主に古墳時代から鎌倉時代後期頃の遺構を検出している。柱穴遺構21基(調査区南壁土層断面中分の1基含む)、溝遺構2基、不明遺構1基である。この他では、SP-07内より瓦器碗が出土している。また、SP-09、10においては柱痕が残存している状態で検出した。なお、SP-12、13においては埋土上面及び中層に焼土痕が残存していた。

第3遺構面では、主に古墳時代頃の遺構を検出している。ピット状遺構17基、溝状遺構1基、小動物など有蹄類の足跡遺構33個である。

### 出土遺物

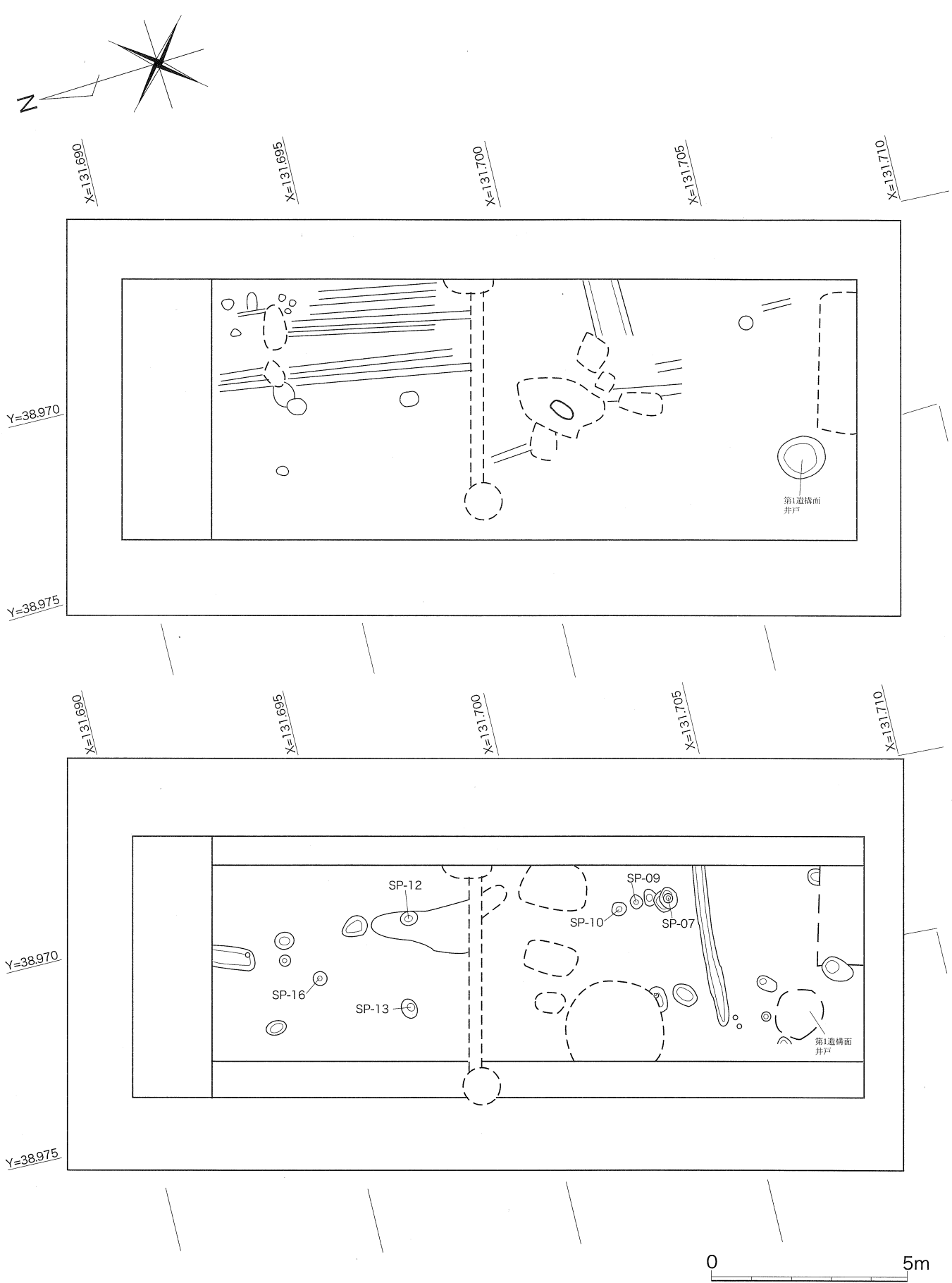
今回の調査において出土した遺物の量は、遺物収納用コンテナパッド(縦14×横36×奥行き56cm)に換算して1箱分である。その種類と内訳は、古墳時代の須恵器や平安時代の須恵器や土師皿などの遺物が出土している。なお、SP-16において須恵器の皿の破片と共に、鉄鏃が1点出土している。

### まとめ

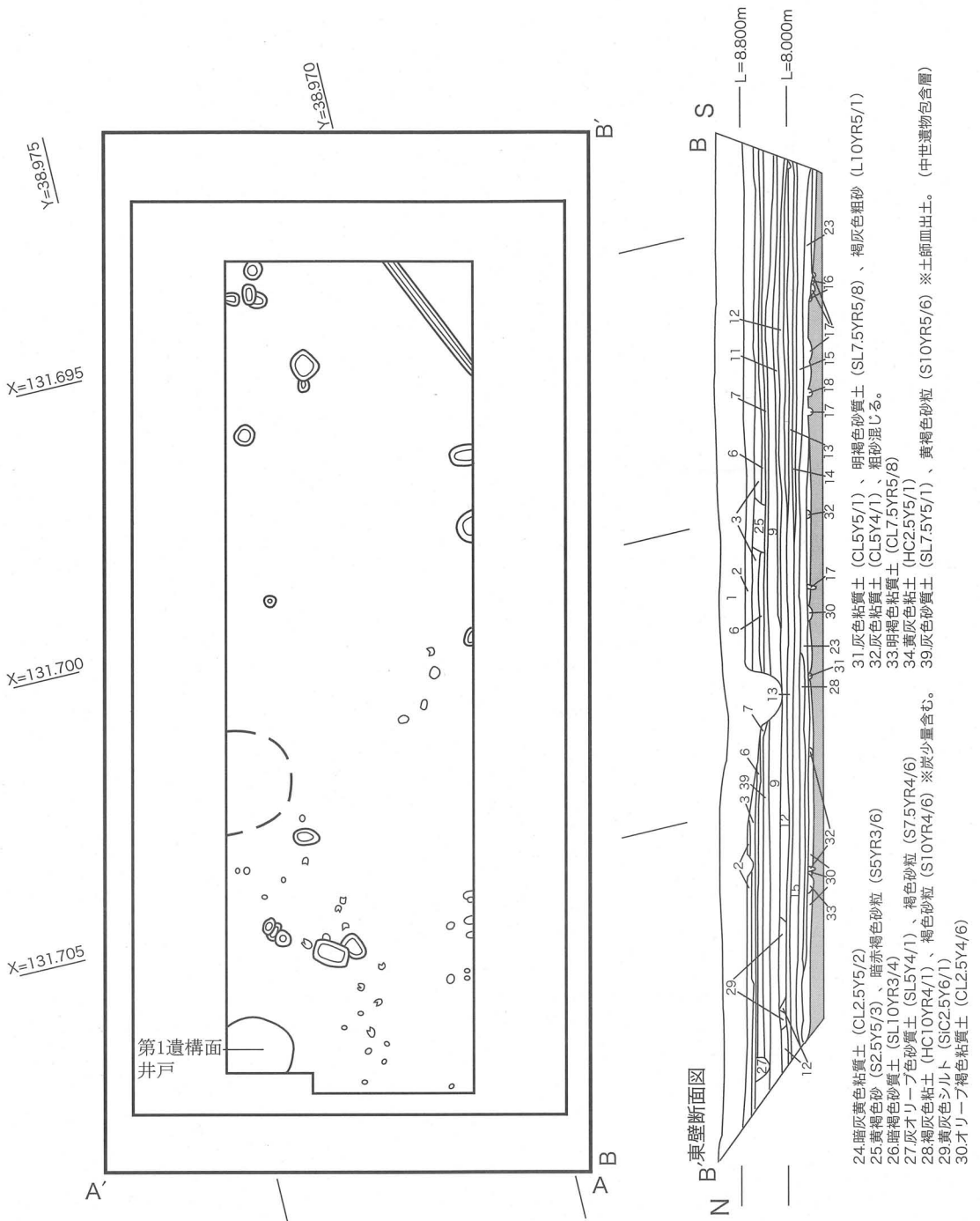
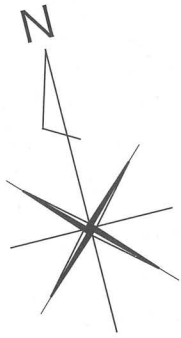
今回の調査から、古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡である茨木遺跡の包蔵地範囲の南限への集落の広がりがみられることとなった。今後の周辺での調査および成果に期待するものである。

### 参考文献

- 大阪府教育委員会『新庄遺跡 府立茨木高等学校建替えに伴う発掘調査概要』平成8年3月  
茨木市教育委員会『平成13年度発掘調査概報』平成14年3月



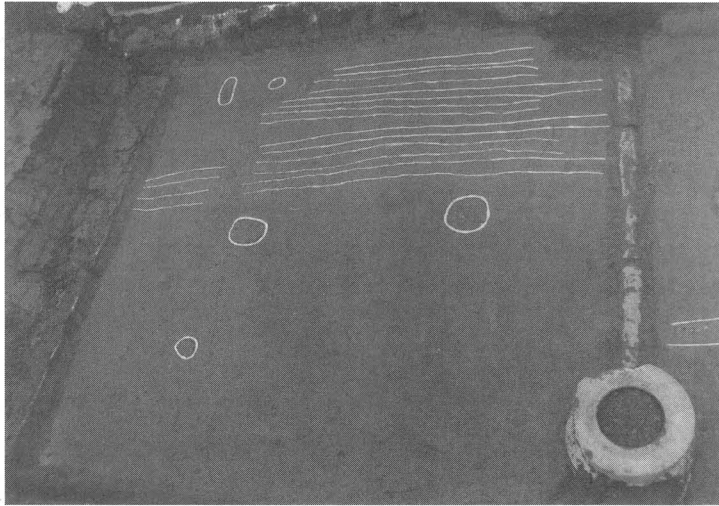
第66図 茨木遺跡 第1遺構面(上)、第2遺構面(下)平面図



- |  |   |
|--|---|
| 1 盛土 (現代整地層)                               | 13 黄褐色粘質土 (CL2.5Y5/4) ※マンガン少量に含む。                               |
| 2 盛土 (現代攪乱層)                               | 14 黄灰色粘土 (HC2.5Y6/1)  |
| 3 オリーブ褐色砂 (S2.5Y4/6) ※土器細片出土。マンガン多量に含む。    | 15 暗オリーブ褐色粘土 (HC2.5Y3/3) ※~0.5mmの粗砂多量に混じる。                      |
| 4 暗灰黄色砂 (S2.5Y5/2)                         | 16 黒褐色粘土 (HC2.5Y3/2)  |
| 5 灰白色シルト (SiC5Y7/2)、明褐色砂粒 (S7.5Y5/6)       | 17 黒褐色粘土 (HC2.5Y3/1)  |
| 6 浅黄色砂 (S2.5Y7/3) ※第1遺構面、遺物包含層。マンガン多量に含む。  | 18 黄灰色粘土 (HC2.5Y4/1) ※~0.5mmの粗砂混じる。                             |
| 7 黄灰色粘質土 (CL2.5Y6/1) ※マンガン多量に含む。           | 19 暗オリーブ褐色粘土 (HC2.5Y3/3) ※~0.5mmの粗砂混じる。                         |
| 8 暗褐色粘性砂質土 (LiC7.5YR3/4)                   | 20 黄褐色粘土 (HC2.5Y5/6) ※地山層。                                      |
| 9 灰色粘質土 (HC5Y6/1) ※マンガン多量に含む。              | 21 褐灰色粘土 (HC10YR4/1)  |
| 10 オリーブ褐色粘質土 (HC2.5Y4/3) ※第2遺構面、柱穴遺構埋土。    | 22 明黄褐色砂質土 (SL10YR6/6)、黄灰色粘質土 (CL2.5Y6/1) ※2~5cmの礫混じる。炭化した木片出土。 |
| 11 黄灰色粘性砂質土 (LiC2.5Y6/1) ※土器細片出土。          | 23 黒褐色粘土 (HC10YR3/2)  |
| 12 黄褐色粘性砂質土 (LiC2.5Y5/4) ※炭少量含む。マンガン多量に含む。 |   |

- |  |   |
|--|---|
| 24 暗灰黄色粘質土 (CL2.5Y5/2)                       | 31 灰色粘質土 (CL5Y5/1)、明褐色砂質土 (SL7.5YR5/8)、褐灰色粗砂 (L10YR5/1) |
| 25 黄褐色砂 (S2.5Y5/3)                           | 32 灰黄色粘質土 (CL5Y4/1)、粗砂混じる。                              |
| 26 暗褐色粘質土 (SL10YR3/4)                        | 33 明褐色粘質土 (CL7.5YR5/8)                                  |
| 27 暗オリーブ色砂質土 (SL5Y4/1)、褐色砂粒 (S7.5YR4/6)      | 34 黄灰色粘質土 (HC2.5Y5/1)                                   |
| 28 褐灰色粘土 (HC10YR4/1)、褐色砂粒 (S10YR4/6) ※炭少量含む。 | 35 灰色粘質土 (SL7.5Y5/1)、黄褐色砂粒 (S10YR5/6) ※土師皿出土。(中世遺物包含層)  |
| 29 黄灰色シルト (SiC2.5Y6/1)                       |   |
| 30 オリーブ褐色粘質土 (CL2.5Y4/6)                     |   |

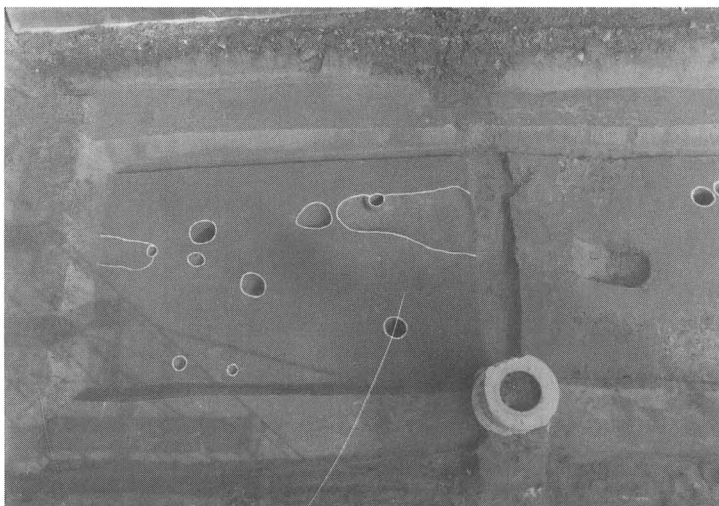
第67図 茨木遺跡 第3遺構面平面図及び東壁土層断面図、南壁土層断面図



調査区北部 第1遺構面検出状況（西から）



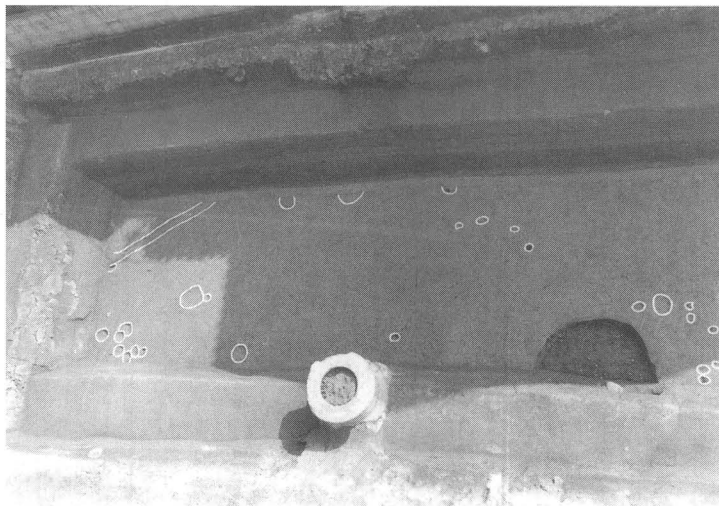
調査区南部 第1遺構面検出状況（西から）



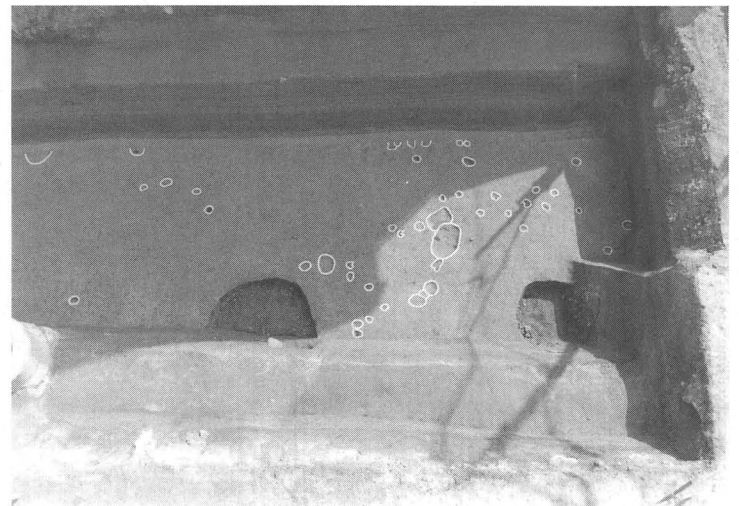
調査区北部 第2遺構面完掘状況（西から）



調査区南部 第2遺構面完掘状況（西から）



調査区北部 第3遺構面完掘状況（西から）



調査区南部 第3遺構面完掘状況（西から）

第68図 茨木遺跡 第1～3遺構面検出状況



報告書抄録

ふりがな書名	おおさかふいばらきしへいせいじゅうはちねんどはくつちようさがいほう 大阪府茨木市平成18年度発掘調査概報							
副書名	平成18年度(2006年度)							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ書								
編著者名	宮脇薫・中東正之・黒須靖之・宮本賢治							
編集機関	茨木市教育委員会							
所在地	567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな所収遺跡名	ふりがな所在地	コード市町村	緯度遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 <sup>2</sup> m	調査原因
ちゆうじょうしょうがっこう遺跡 中条小学校遺跡	大阪府茨木市 新中条町	27211	52	34-48-19	135-33-52	20060105~ 20060204	845	共同住宅
ほづみはいじ 穂積廃寺跡	かみほづみ 上穂積二丁目 三丁目	27211	60	34-49-13	135-33-56	20060105~ 20060331	1,444	土地区画
いばらき 茨木遺跡	ほんまち 本町	27211	104	34-48-49	135-34-32	20060501~ 20060531	268	共同住宅
ちゆうじょうしょうがっこう遺跡 中条小学校遺跡	えきまえ 駅前一丁目	27211	52	34-48-54	135-33-53	20060501~ 20060519	147	店舗付共同住宅
ひがしなら 東奈良遺跡	東奈良二丁目	27211	55	34-48-12	135-34-2	20060619~ 20060807	473	共同住宅
中条小学校遺跡	しもちゆうじょうちよう 下中条町	27211	52	34-48-40	135-33-59	20060713~ 20060826	349	共同住宅
東奈良遺跡	東奈良三丁目	27211	55	34-49-00	135-34-38	20060710~ 20060830	250	共同住宅
茨木遺跡	おおてちよう 大手町	27211	104	34-48-54	135-34-15	20060928~ 20061020	199	共同住宅
所収遺跡名	種別	主時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中条小学校遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	古墳(方墳)土壇 柱穴 建物群		土師器 須恵器 陶磁器 鉄製品・埴		古代の南北棟の建物3棟・ 倉庫1棟を確認	
穂積廃寺跡	寺社	飛鳥時代 (白鳳)	柱穴 溝 土壇		土師器 須恵器 軒丸瓦片			
茨木遺跡	集落	古墳時代 中世 近世	溝 柱穴 水路 道路遺構 流路		土師器 木簡 陶磁器・瓦・鉄製品		建具等一括出土	
中条小学校遺跡	集落	中世	井戸 溝 柱穴					
東奈良遺跡	集落	中世 近世	柱穴 溝 ピット 円形周溝 土壇 土取壇		土師器 須恵器 陶磁器			
中条小学校遺跡	集落	飛鳥時代 奈良時代	掘立建物群 耕作溝		石器 土師器 須恵器			
東奈良遺跡	集落	弥生時代	溝 土壇ピット		弥生土器 土師器 須恵器		方格規矩鏡(破鏡)出土	
茨木遺跡	集落	古墳	溝 柱穴		土師器 須恵器		茨木遺跡の包蔵 範囲の拡大	

**平成18年度発掘調査概報**

発行日 平成19年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社 トウヨー